

江戸名所圖會

十七

カニ
三六
冊

ル 4

5105

17



門ル4
號5105
卷1617



下谷岡

武蔵國風土記殘篇曰 豊嶋郡下谷岡貢鹿狍兔狸山鵠雉雀等又

貢薯蕷松脂云云

五條天神宮

東叡山の巽の麓瀬川氏の比あり

祭神少彦名命

一坐 本朝醫道の祖神

北野天満宮を相殿とす

菅神の像の寛永十八年慈眼

當社より東叡山のうらやあり

寛永永壽寺草創の御師連

菊田台涼云其地の上所

歌師瀬川留億の宅地

遷すせらる

毎歳節分

の夜白本神事を御行す

北國記行云 正月の未むさう神のさうい思の出は優遊くさうり法坐の社

五條天神と申さうり折る枯る茅原を焼く

響りをさうりさうりれつる昔の初草と多ひの罍のさかた下る 荒惠

王山常樂院

長福壽寺と号す

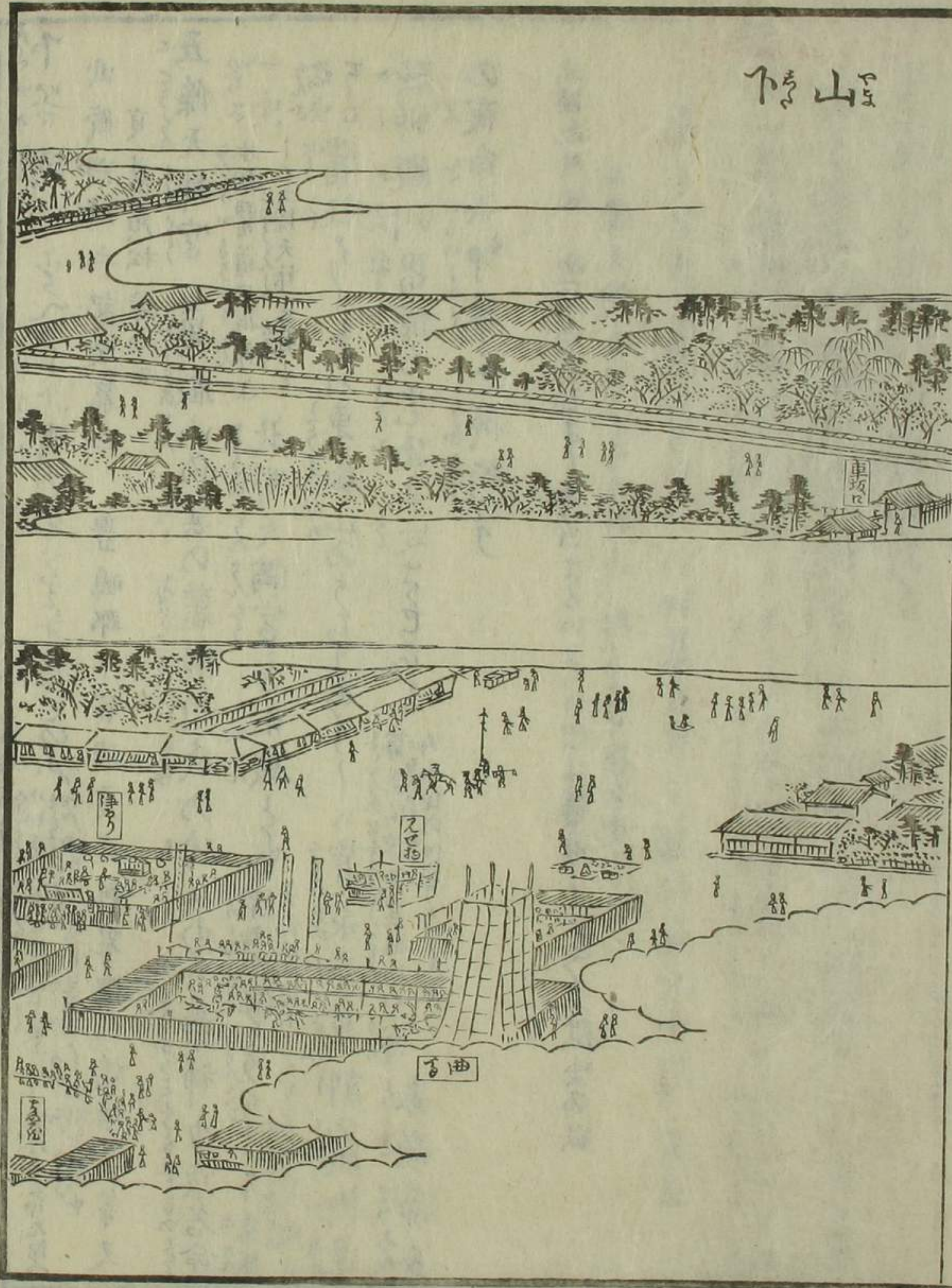
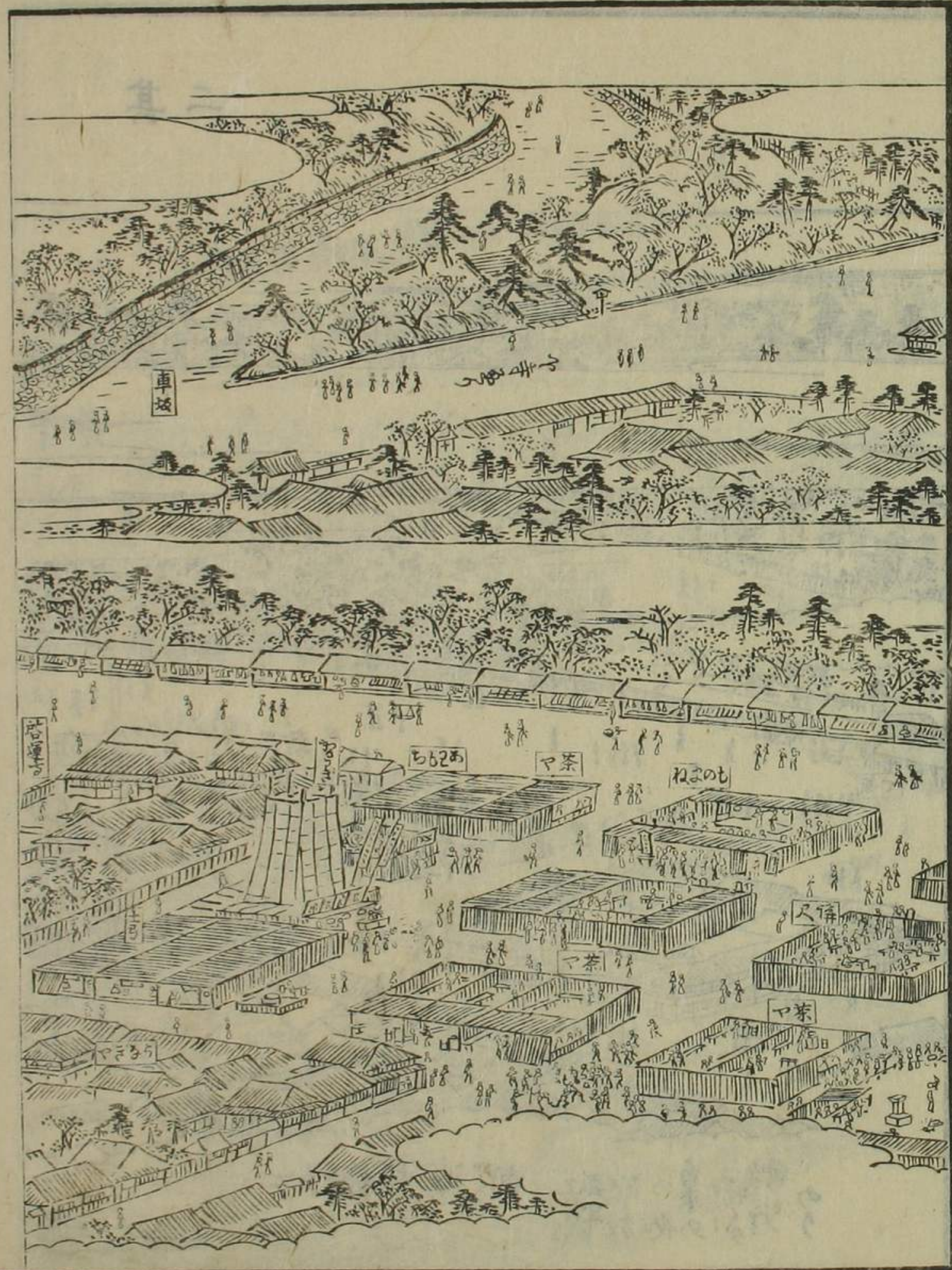
天台宗五條天神の南叡川の向

あり奉る阿弥陀如来の行基大士の作り

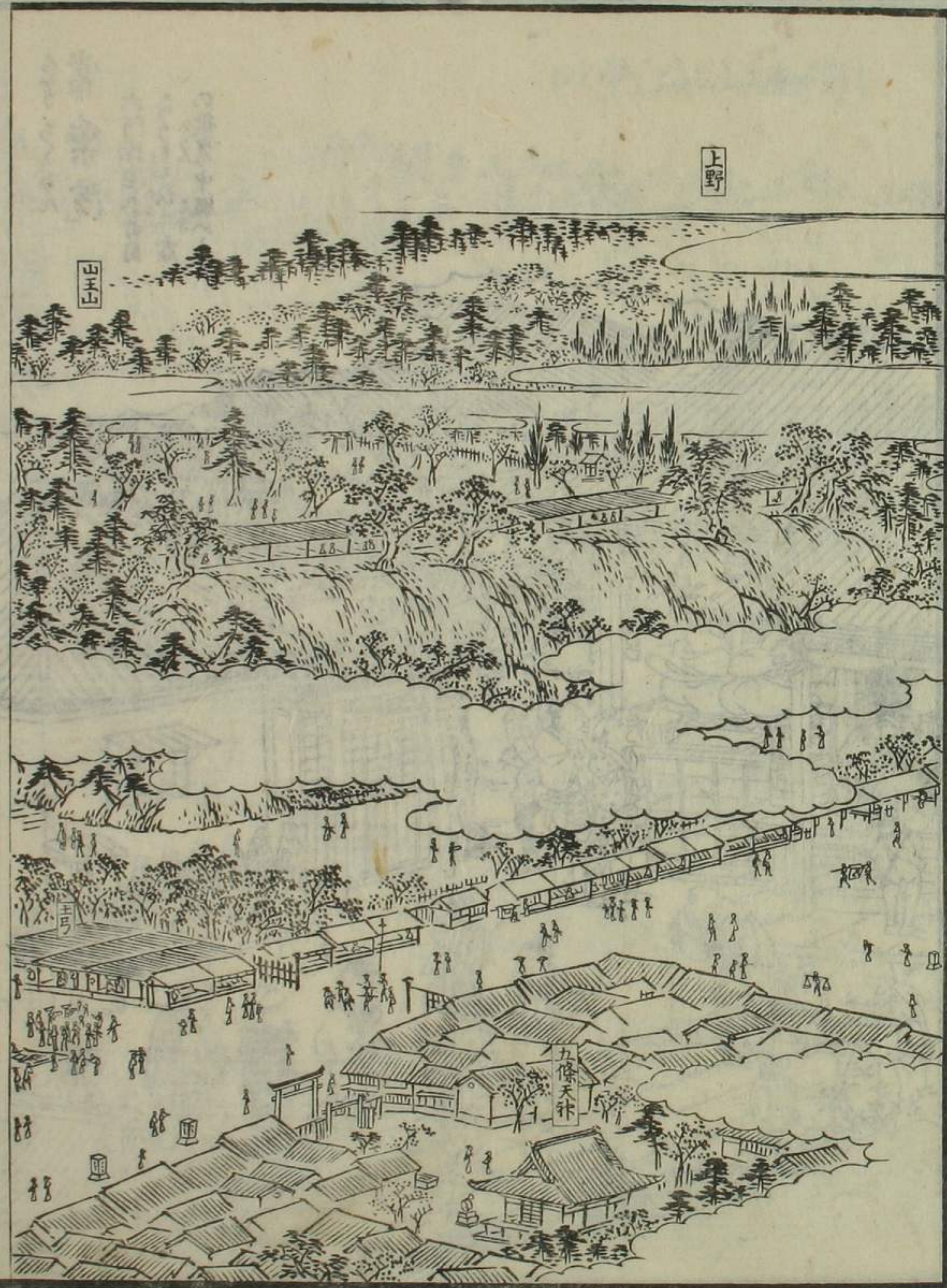
て西海陀茅五番目

至二月八月の彼岸中甚賑なり

昭和41年12月20日
原安三郎



十七ノ冊
六ノ四十九

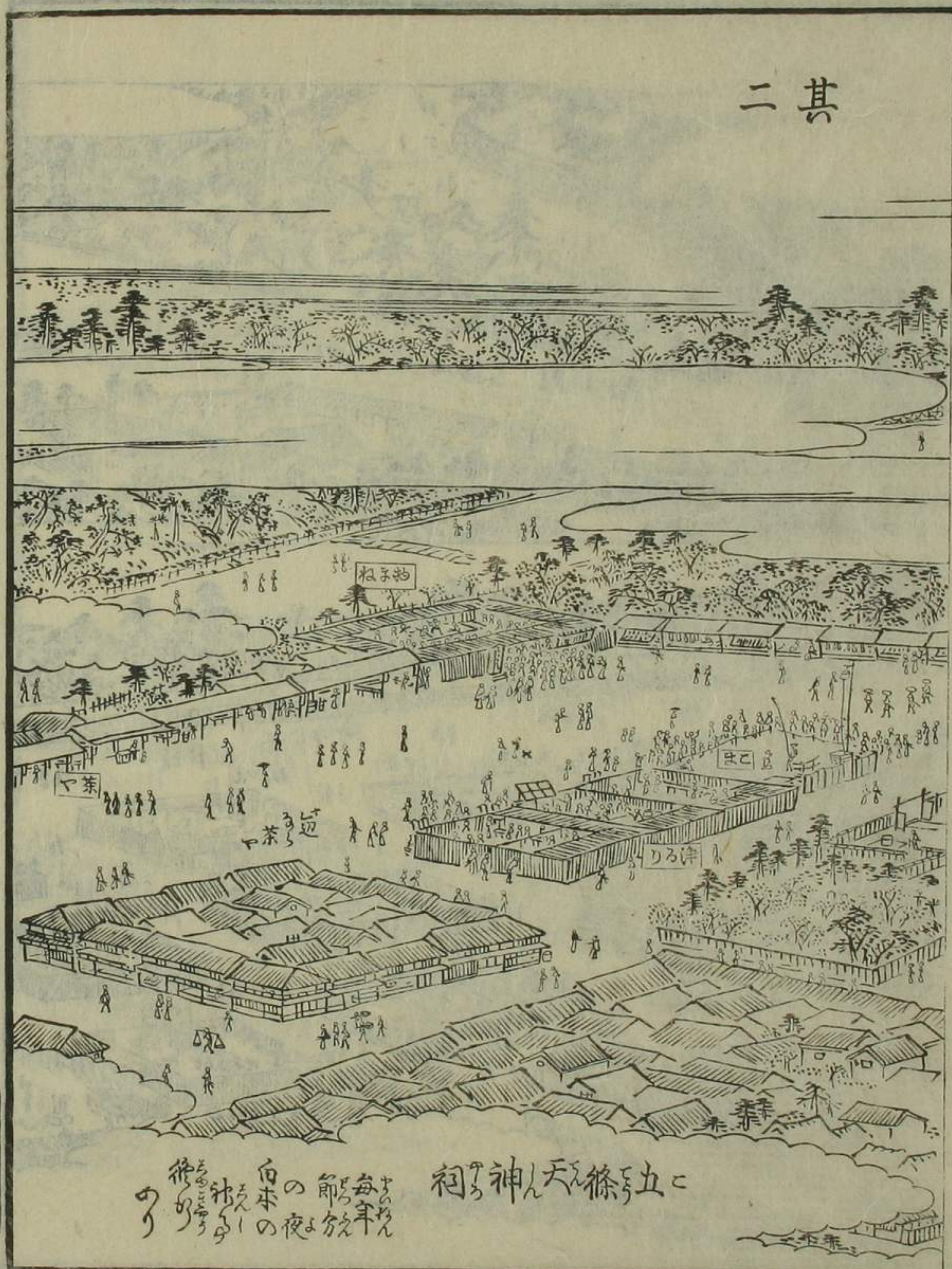


上野

山王

九條天神

其二

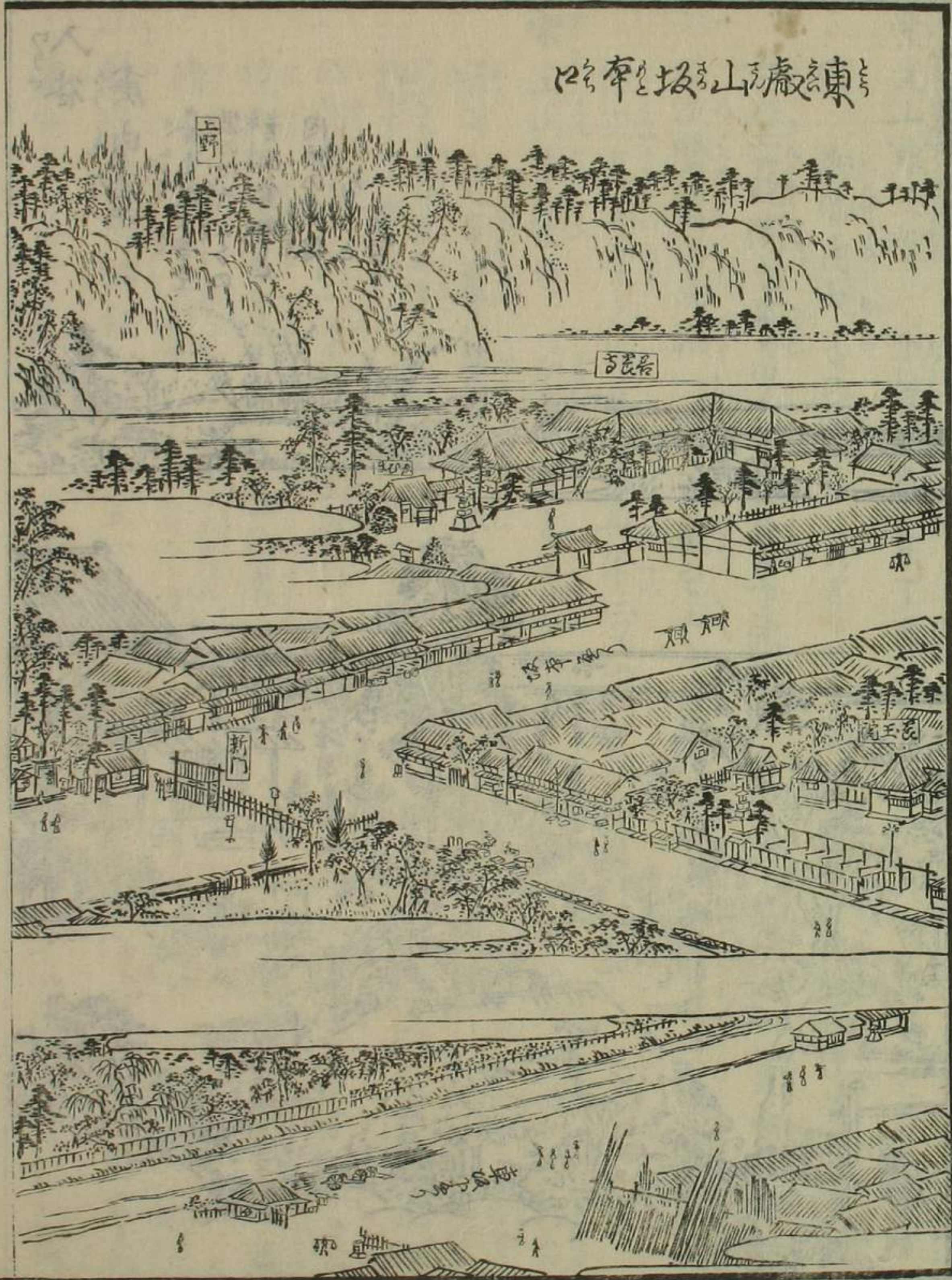


茶子物

毎年の節分夜
 向本の夜
 徳田の夜
 約々神天孫五に

六ノ五十一

東之山坂本



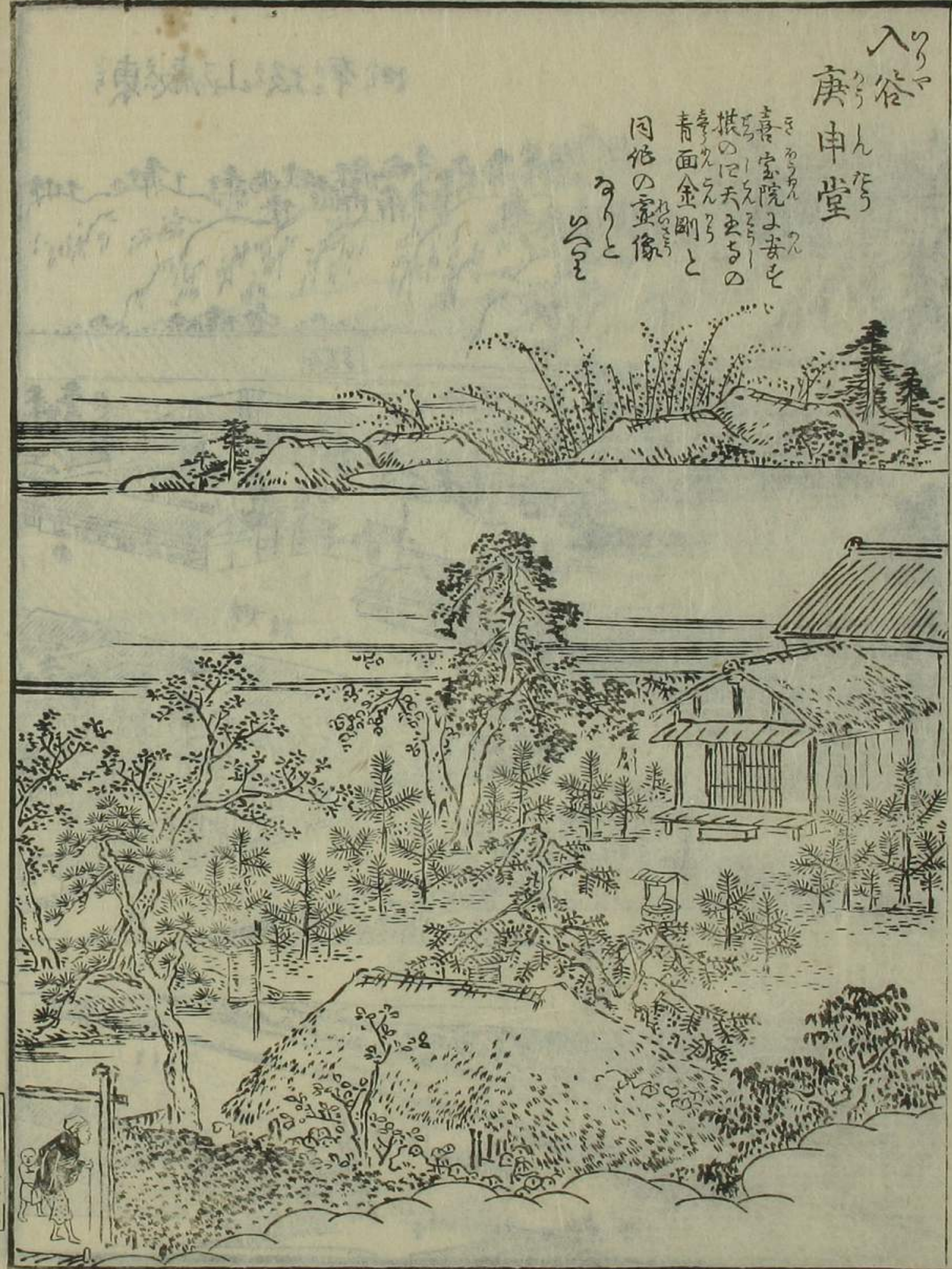
常樂院

六阿弥陀五菩薩
の御尊中振へ



入谷
庚申堂

喜宝院に母を
供した天竺の
青面金剛と
因幡の靈像



金光山親玉院

下谷坂本壹丁目の南にあり天台宗にて往昔の今
の御城内大子の辺りより慶長の頃今の地に移りて往
古の三藐院と号するを宝永年間今の名に改むるなり當寺は釋迦
の涅槃像の画軸一幅を藏せし上慈眼大師の讚あり三國傳燈大
僧正天海書とあるなり毎年二月十五日是日洋々といふ

藥王山善養寺

延壽院と号する因幡坂本壹丁目の左側にあり天台
宗にて奉尊の藥師如来を安んずる寺僧云此寺その小野照崎明神の本地佛あり
相傳りて當寺は善養寺なり當寺は天長年中慈覺大師の草創奉るも因幡大師
の作なりといふを額に圓滿の二字を刻し黄壁木庵老人の筆なり

境内に圖魔堂あり

圖玉の像の運慶の作なり正月七月十六日祭
請君羊集と
或人云く此寺圖玉の像の神別長利學校あり

小野照崎明神社

同所三丁目の右側にあり祭神泰儀小野篁の
靈ありといふを社傳あれとも詳れらざるなり始らざるを當社の坂

奉の鎮守ありて八月十九日を以て祭日とて別當の天台宗ありて

小野山嶺松院と号す

或人云當社の其先是より出を堂ありて頃その傍ありて小野の林と稱す小野首と云く儒教を崇め所別是利に學子校を闢く其後彼地よりを遷すの傍に堂の傍を

佛迎山安樂寺

金枝あり正保年中正蓮社意的和尚當寺を創

一寺院の末より捨世一流の淨域なり昼夜不退念佛三昧あり

殊勝あり

寶鏡山圓光寺

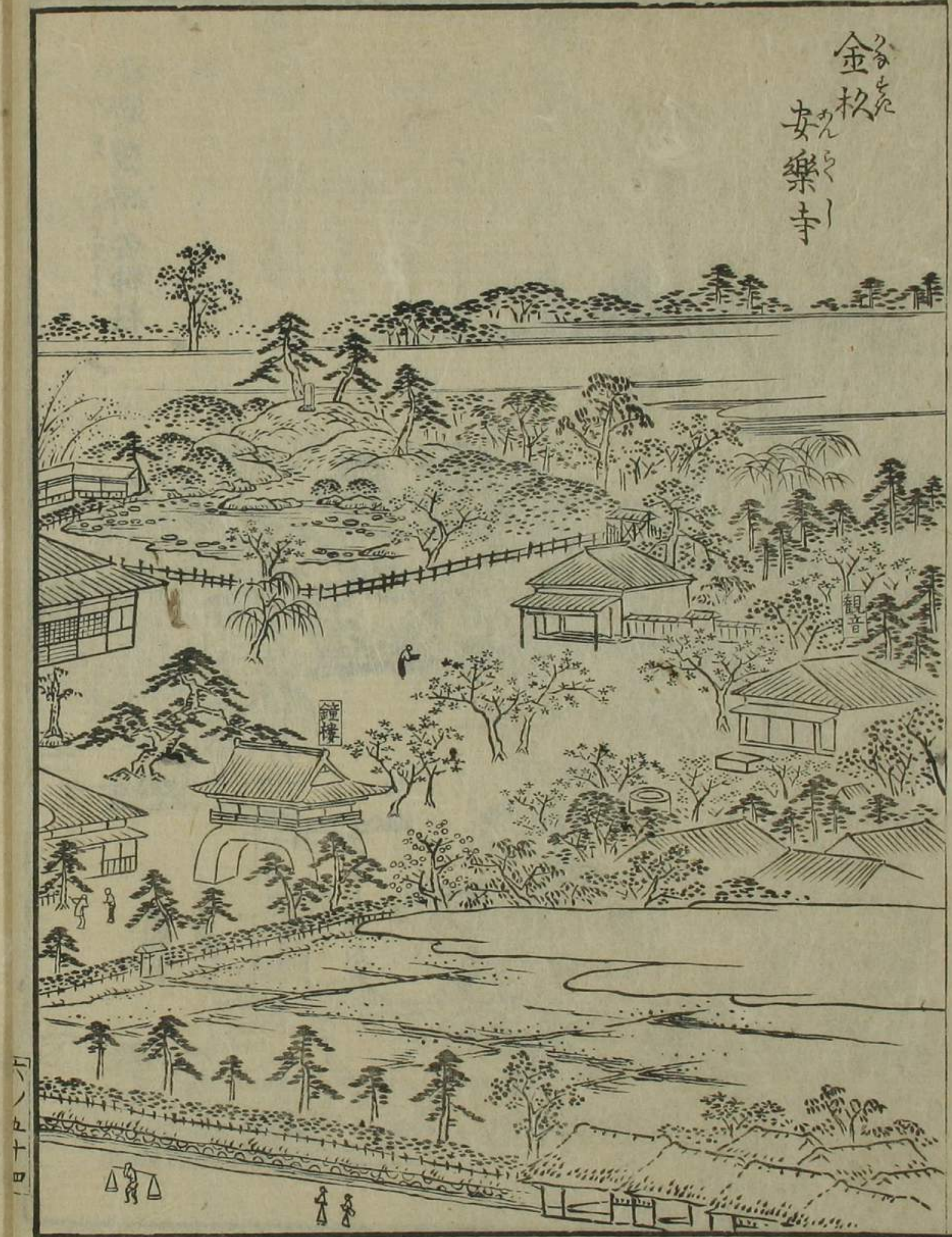
根岸の里あり濟家の禪林あり釋迦如來を奉

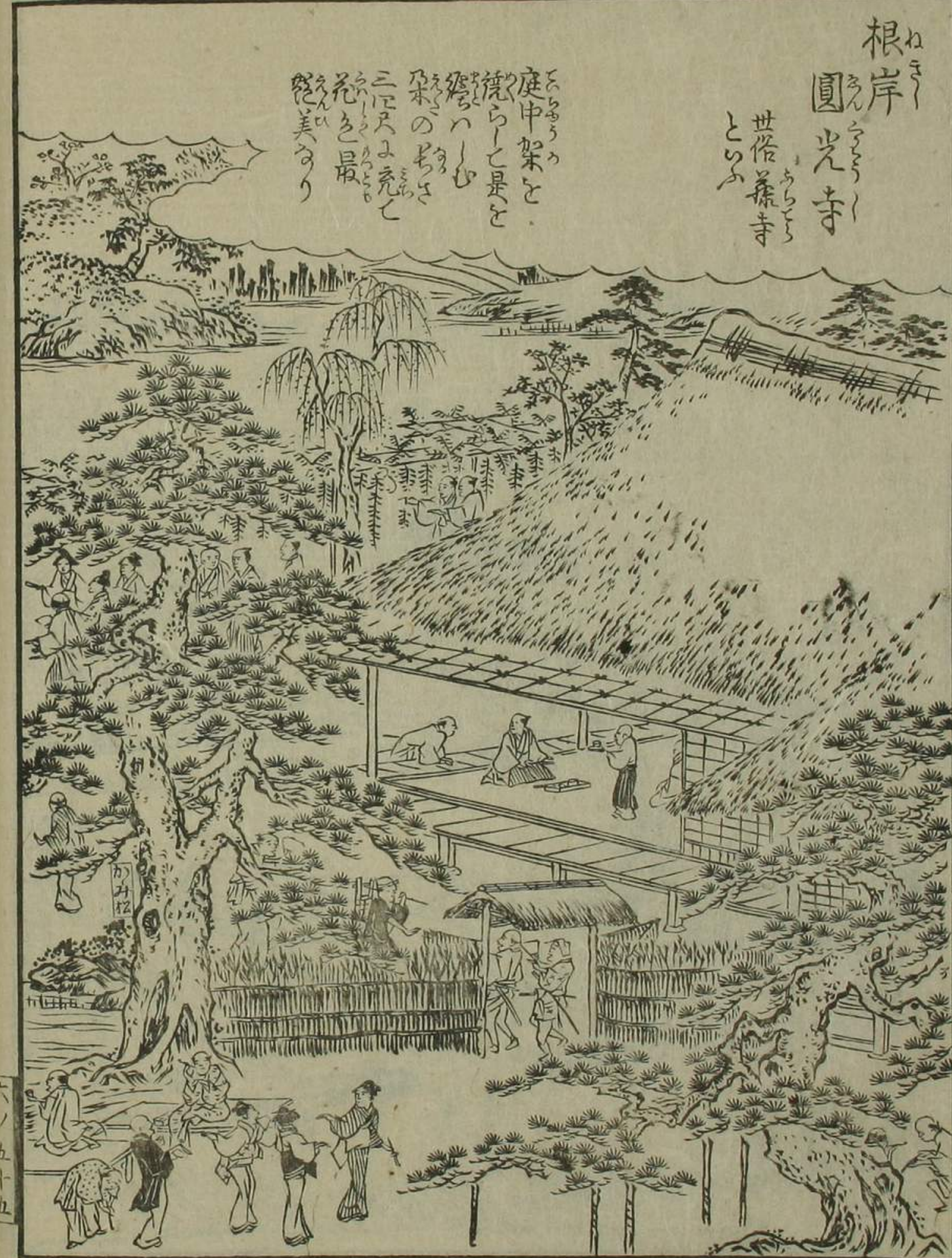
向られ紙條寺と稱せり堂前鏡の松と唱ふる名樹あり

鎮守の辨財天弘法大師の作なりと云ふ

小野照濟内神社







時雨岡 岡野庚申塚と云るより三四丁良の方小川は傍にあり一株

の古松のりとは不動尊の草堂あり土人此松を御行の松と号す其由

始くは省畧を一小時雨の

田圃雜記 多々の岡と云るをみと松原のありある

あつちやと云

霜の後あられども雨をいよしの雲の松もひれ〜 道與准后

按て是の田と云る東嶽山の旧名なり此山も東嶽山より連綿たれは田圃雜記に出る

東陽山正燈寺 龍泉寺あり妙心寺流の禪刹なり承應三

年思堂和尚草創を禪師の遺傳を説起せ玉皇國師の語録にほまひあり 當寺

の後園桐樹多〜 其の山は高嶺山 晩秋の頃ハ詞人吟客ら小群遊

其紅鬘を賞と

真覺山西光寺 兼輪新所あり浄土宗なり長和元年の草創

なり卒る門徒院如未ハ惠心僧都の作并山ハ聖蓮社賢譽上人たり

千束郷 龍泉寺所の辺今僅の地をいへ玉一は餘邊と云き菊岡

佑涼の説は此地を依々律見の里とも号くとある誤なりこの境

叢祠あり千束稲斎と稱と

或人云性古の上りてこれ浅草天主所の辺より子夜の掃除進をまてく子來と云ひたりと云
仍て按て浅草寺に徳正の鐘の銘に武品豊島郡子來のを金龍山浅草寺とあり又同
境内に西宮稲斎と稱するあり里老傳へて果を上に千束稲斎と号すと云い田原水茶茶の
右文書に子來の内にて阿住三三が石像等の地を左四形六郎河石像熱多の地を左
四大橋鹿同全杖分の地を飯倉彈正忠回近孫の地を島津徐七郎同朝倉分の地を
江戸番區寺領と云ると云たりと云ふを其地の廣大なることを知るへ

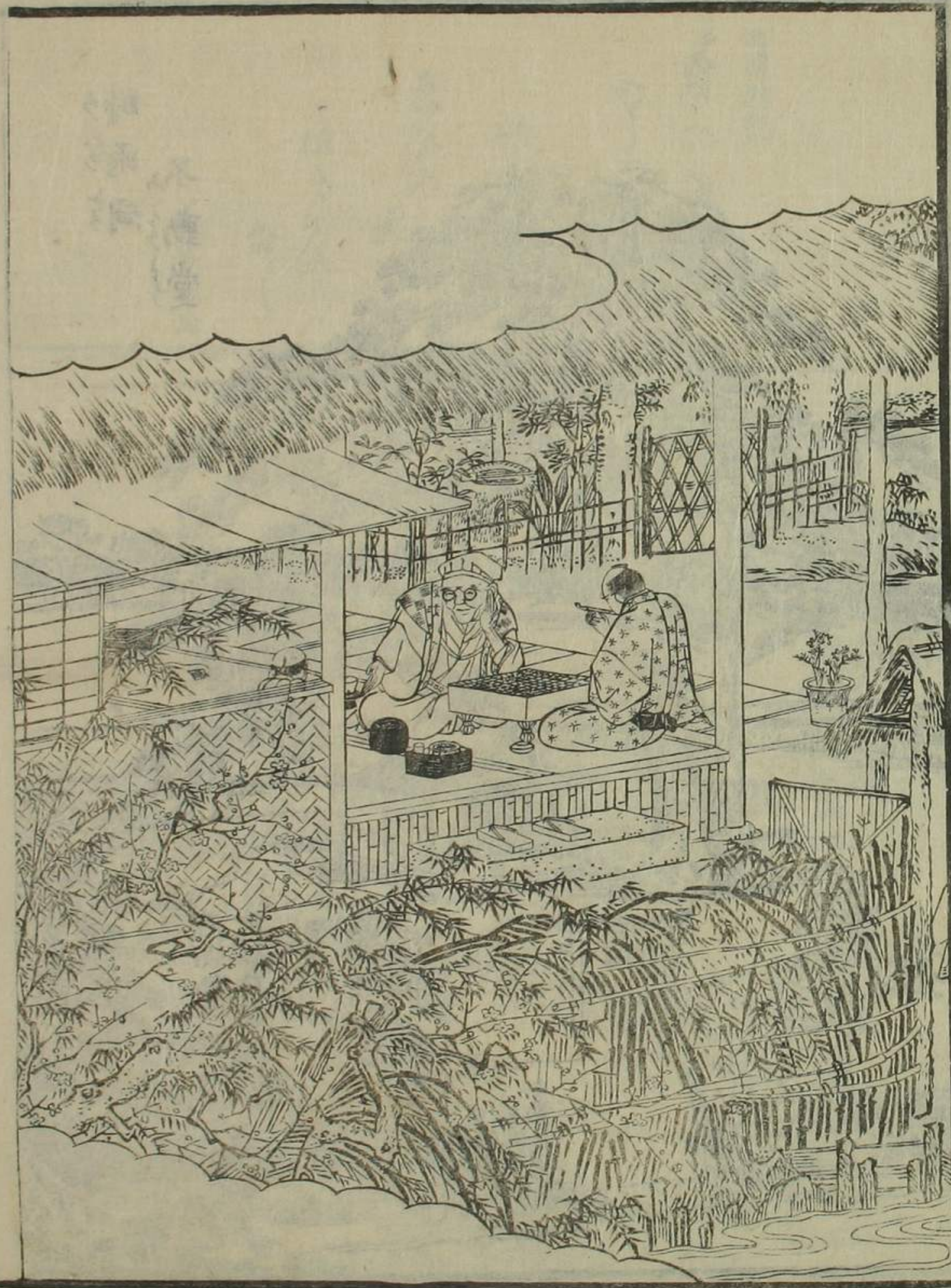
本戸三河守源孝範茅宅舊跡 傳云今三河嶋と稱する地ハ三河守居

住の舊跡なる好まき早うと云

或云此地の細言三河守といふ人の
此地なる好まき早うと云
孝範家集云 此の國よりまき早うの郡に入れたる所あり住するりり
まき早うのありと云て後で鹿の堂にまき早うの山をさしおくれいれしく
園なるまき早うの地あり人あり住する夜あけいれまき早うと云ふと
まき早うの地なるまき早うの地をまき早うと云ふと云ふと云ふ人の声
まき早うの地なるまき早うの地をまき早うと云ふと云ふと云ふ人の声

曉のあけりいするまき早うの地ありと云ふをまき早うと云ふらん

返

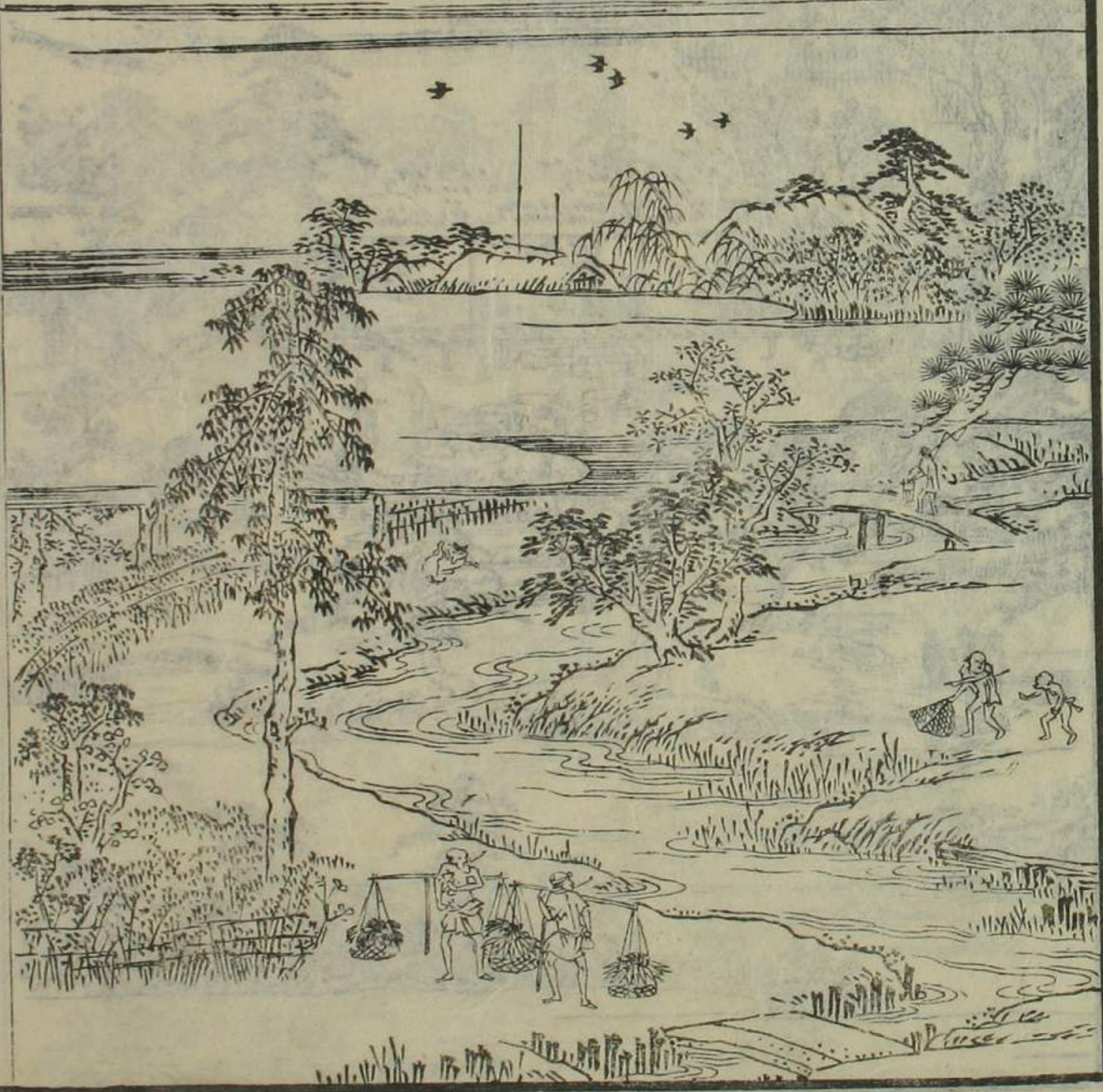


えきねき
 吳竹の根着の里ハ
 上所の山蔭マシ
 幽趣あり故中
 都下の遊人多クハ
 小隠棲と花
 あり常水マシ
 陸中よりこの地
 産すりの其声
 ひとあありそ

世々賞受
 せらむ

いろは

回國雜記
 霜の後
 あつらふま
 かり
 時雨さ
 めいの
 岡の
 松も
 うい
 道真准后



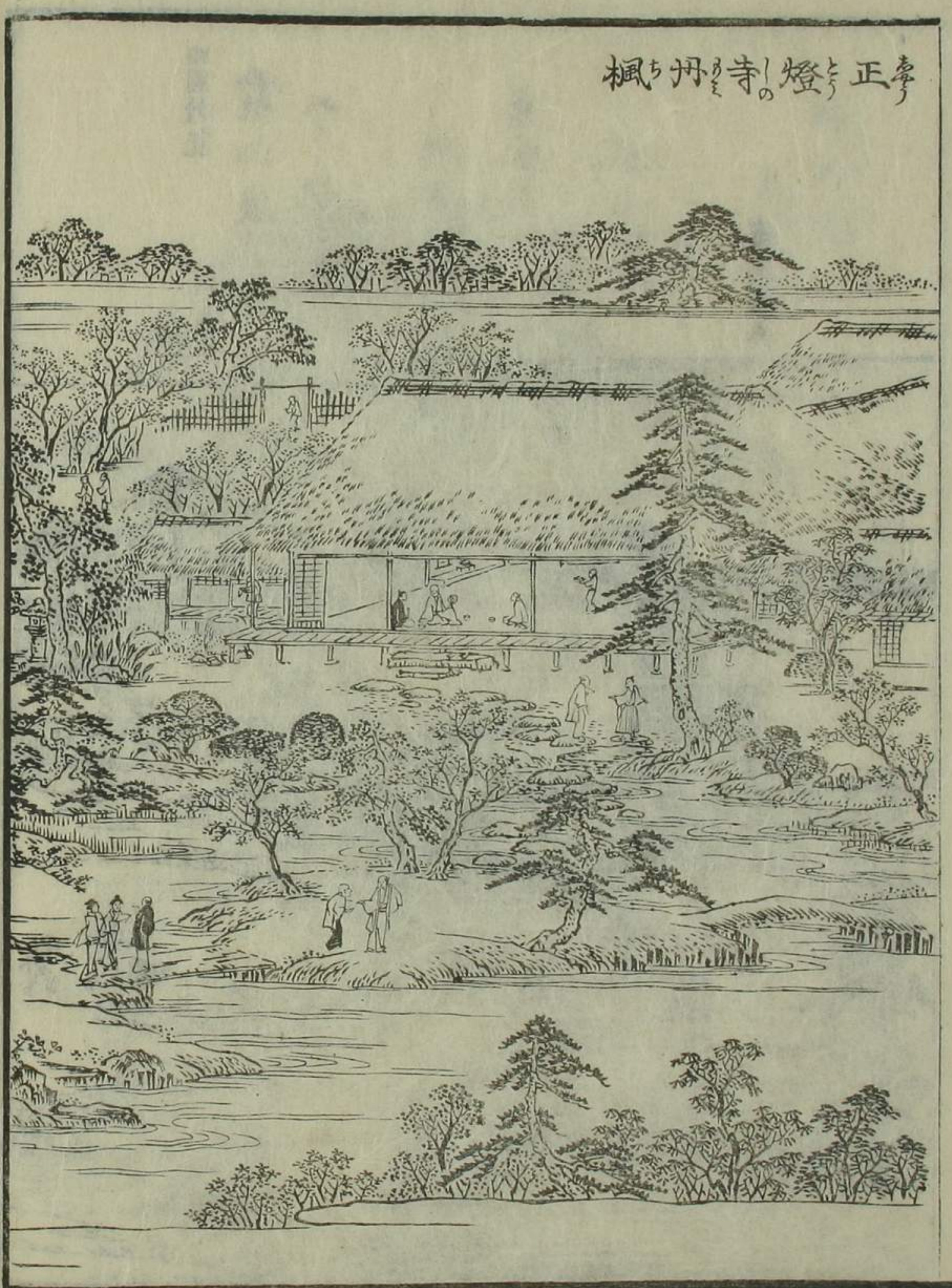
時雨の
 不動堂



庭中楓樹取
 晩秋の紅錦の
 海晏寺の園林
 もも亦る色あり
 實一時の
 奇観
 たり



正亭燈寺の丹楓



軒近く去りまわると宿とみり待て夜氏のあひよとむさけ

梅花無盡藏云 木戸公号罷釣翁保和歌之正脉
余在洛而葦殿聲譽久之矣今也共寓武野之佳脉
境隅田之上流可謂暗投也聊奉攀未篇之韵脚云
二賜詠歌三篇可謂暗投也聊奉攀未篇之韵脚云
十月六日 文正十七年六月廿二日也
雪月寧非老年伴
偶田春色浪花 鳥若知都我細問

按孝範の事武野國書嶋とりの歌入りけり所住りりありり
おとあつと云云又梅花をそよ風の詩の序にホカヌを罷釣翁と
佳境隅田の上流に寓すと云り合を考へまはるに傷の地はそよの川跡に似せ

本戸孝範の從五位下叙一前二行守と云又罷釣翁と号と今川
了俊の一族よりさ田道灌東常縁及び正徹宗祇公致万里探
と同時世の人なり操倉大草紙又孝範の冷泉中納言持好御の
兄弟よりさ雙の哥人なりとあり同書又長祿元年東の礼り
付て京都將軍家の舎弟左馬頭政智東軍の宣旨をさり
下向ありとりの条下供奉の人の中此孝範の名あり
貞觀建武二年

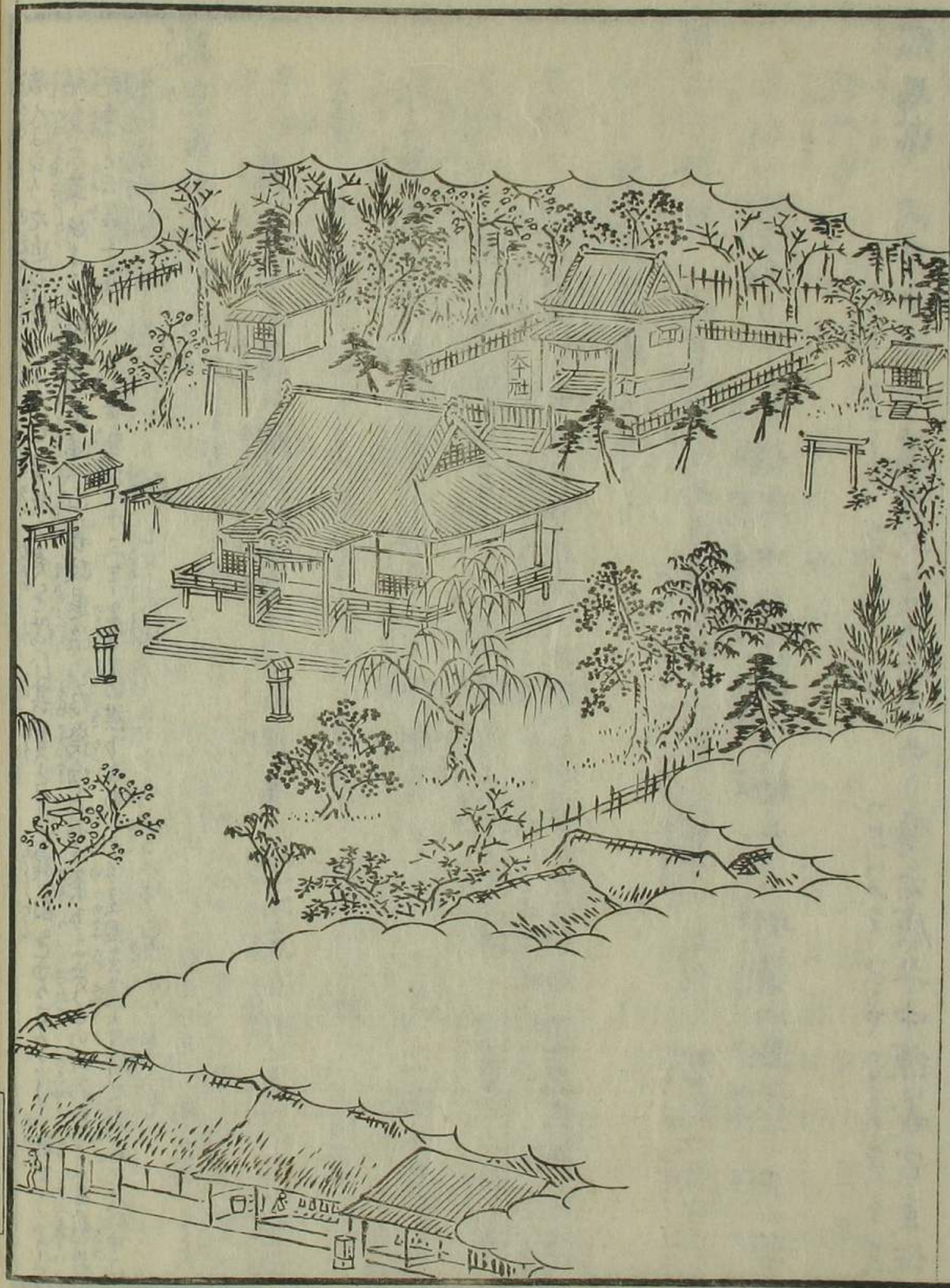
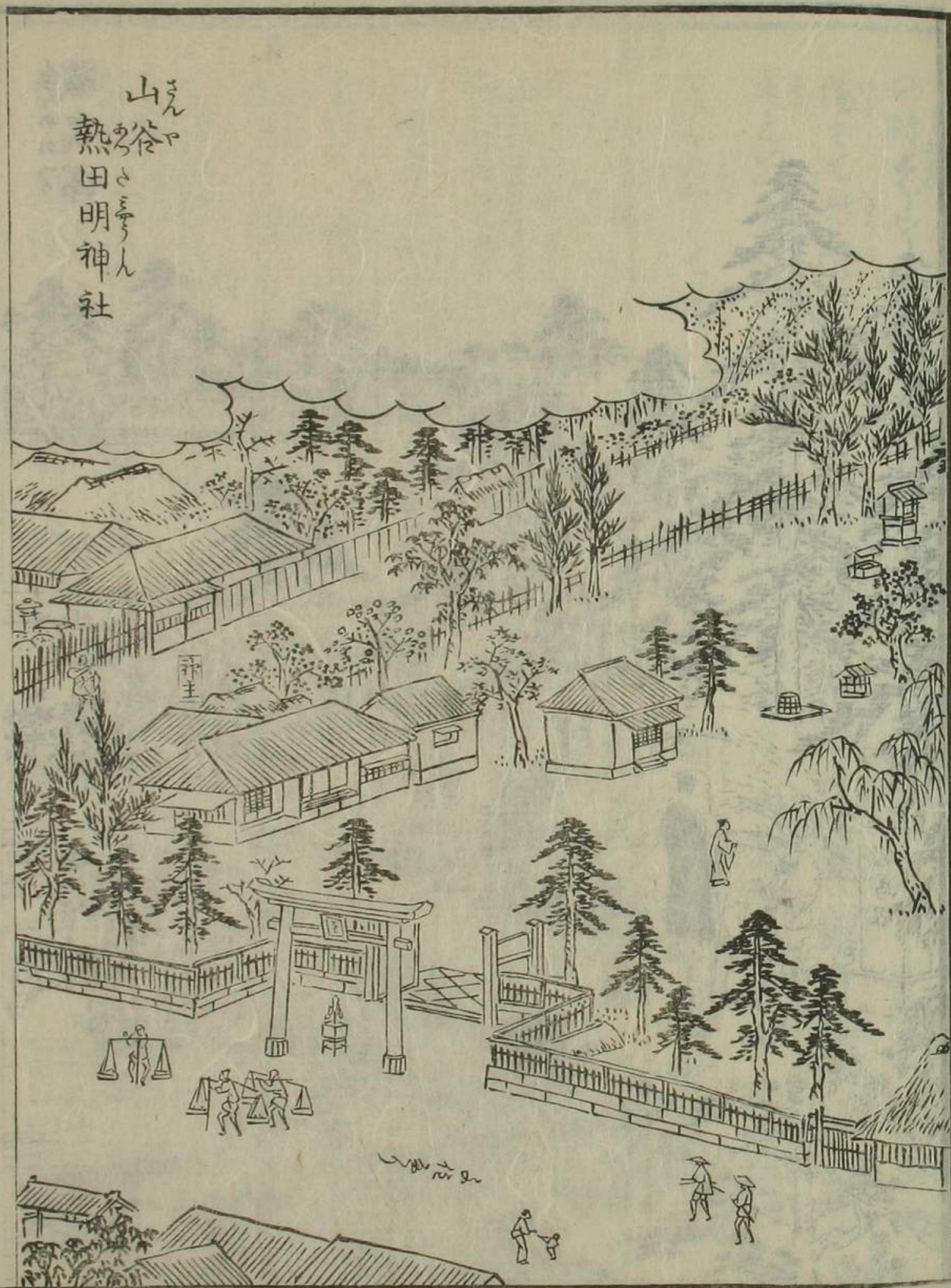
藏人よりた近の御所より入るる御所の奥に其賞とて異殿と云り記せり
操倉大草紙又永徳二年氏備小山義政退治のな發向とある条に孝範の弟の中本戸孝範
範季と云名を奉く同書又永徳二年憲基の旗にありと云豆田五清本とて討死の人の中
本戸孝範備範と云名を住りたりれも其氏族の入りありと云り孝範を考へて
萬里居士寓居地 前記に萬里居士本戸孝範と云り隅田河の上流に寓せしとあり
萬里居士諱九初花洛の萬年寺に入大主和尚は從ふて其法

を受く禪機文材ありと名譽四方に揚る應仁の乱を避て仁元濃尾の
間萬と後深層の業を廢し自際補居士と号し又一は梅花無盡藏
と稱て文明の末東武に遊り方田道灌翁遇甚涯一確殺して後濃
小歸王老を扱と曾て天下向二十五卷を著て文明中東遊の詩文集
あり梅花を盡藏と号く

藝田明神社 新鳥越小あり祭る所日奉武尊一坐あり當社の往古え
鳥越の地よりあり正保年中今の所より移り例祭に隔年六月十日
執行せ

駿馬塚 同所南例何某り別荘の中よりあり傳云康平中原義家東征

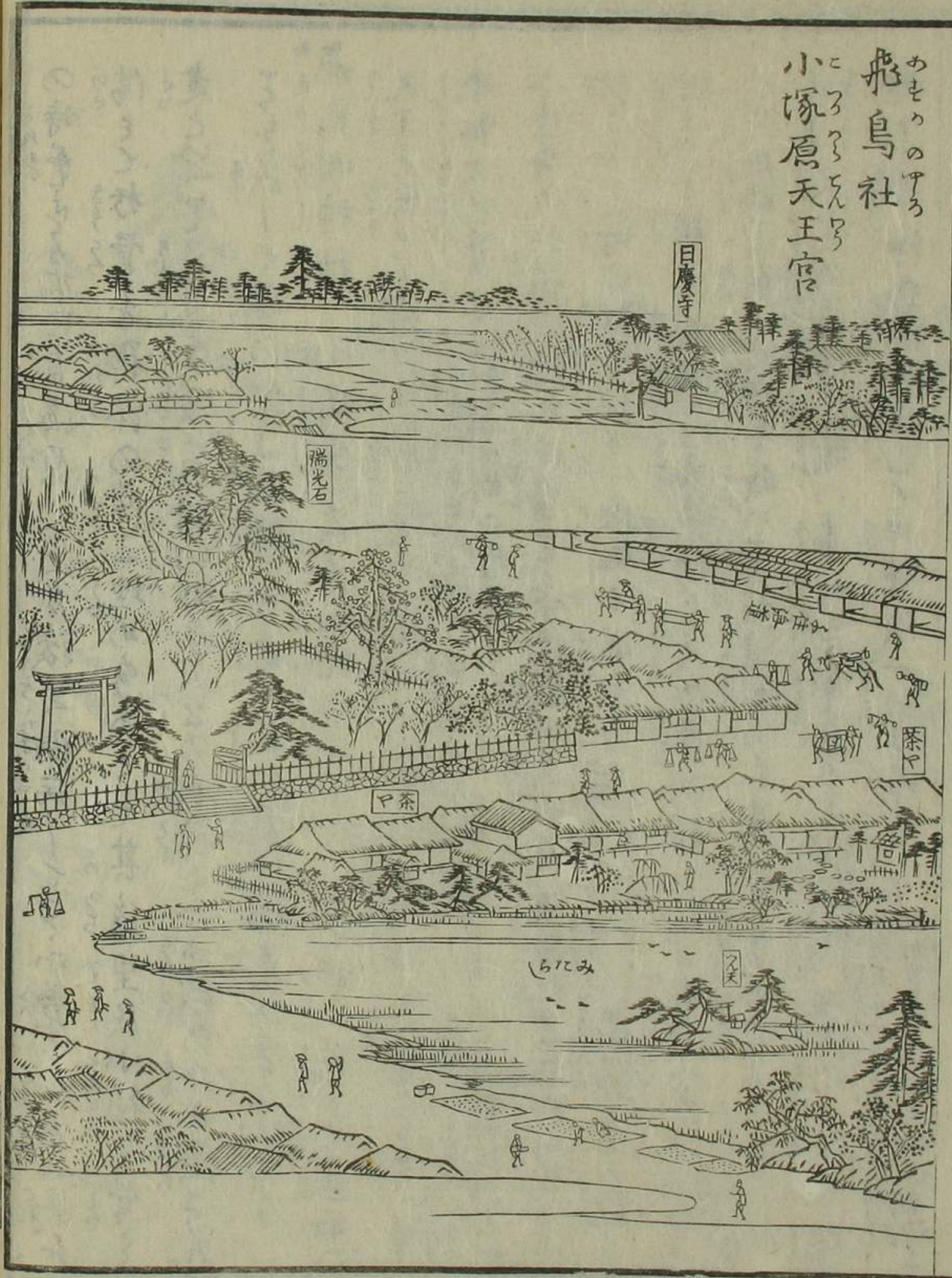
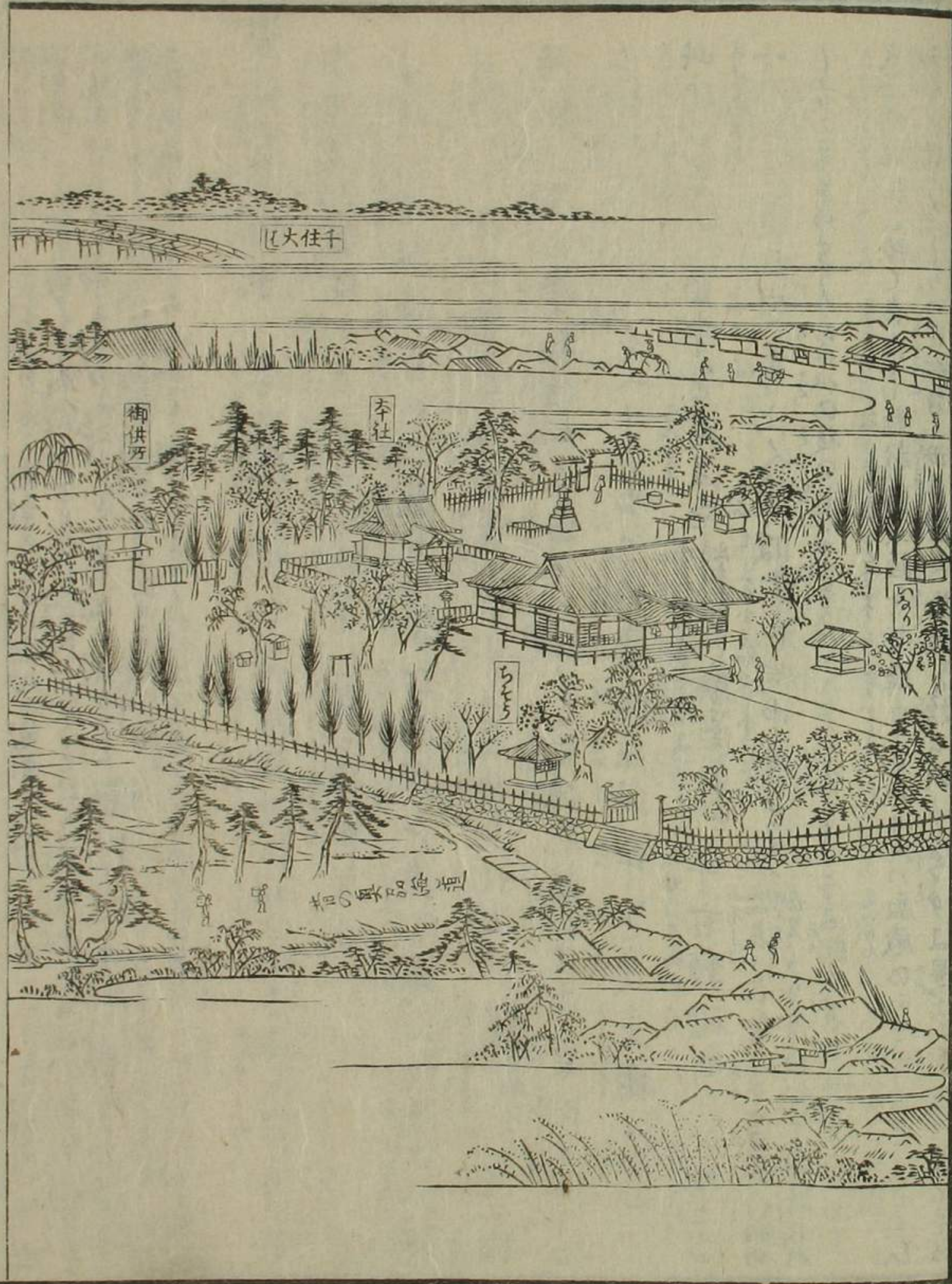
山
熱谷
田明
神社



駿馬塚



の時をよる不の青海原とつる駿馬偶病してこみ驚を公大に思ふ
 傷て朽骨を釋路の傍に埋めめとを其後里民小祠を營て
 建とつて又近き頃其地ありて公の明徳を子歳の下に顯さん
 正を欲して塚の側は石碑を建て祠に其塚の東の方より迂り
 飛鳥明神社 小塚原あり此地の産土神とて四人混りて兼輪の
 天王と称せり列坐ありて護院宮未ありて荊石山神と稱すと号す
 祭神大己貴命 日本紀右拾遺卷下大己貴命の事 事代主命 古事記は事代主命の事
 二坐あり社傳曰往右延暦年中比叡の黒弦師東國化度の御此地より
 至る小糸條の茂王乃る一堆の小塚あり 此塚より此地を 其塚より夜に
 瑞光を現し白衣を着たる二人の黒荆棘生乃る石の上は降臨あり
 て黒弦師より命て曰く我の素盞鳴命の和龜大己貴命なりと 此社牛頭
 又一人の黒羽曰く我の事代主命なりと 此神と号す 云々仍て忌殺鵄
 仰し清浄の池を撰むて此神社一社を奉すと 牛改天皇の御宇六月二日より
 日九日住大橋の南に



一基流れ... 又後木の根... 瑞光石... 二神老... 瑞光石... 又後木の根... 一基流れ... 又後木の根... 二神老... 瑞光石... 又後木の根... 一基流れ... 又後木の根... 二神老... 瑞光石...

曹徳山誓願寺 惠心院と号を花鳥明神の北より浄土宗より

寺傳曰僧都顯密の二教を究め於諸宗を渡り遂に休陀の本願

又歸入一往生要集等を著して大に自化を化せり

僧都上定の慶祐法師と諱りて曰く念佛の教いすく東國より

此比は素の當寺を建立と 中右頼破を増上と

十八世了蓮社定普上人隨彼大和尚中真より

一戒の文とてより孝の徒の教も亦れりと云ひ傳ふるに記を其文と云

惠心僧都輔依て泰内一稱讚浄土経を待講申されり感のあり奉り

御衣を賜りて一右在郷する母の方へ御衣を授られ返りて是を榮と

これくあり恨られ一其文と

登りてとて後ありて後ありて後ありて後ありて後ありて後あり

衣のうとあり君よりいひてとて後ありて後ありて後ありて後あり

養のひとありとて後ありて後ありて後ありて後ありて後あり

食のひとありとて後ありて後ありて後ありて後ありて後あり

名々のなりて後ありて後ありて後ありて後ありて後あり

ありとて後ありて後ありて後ありて後ありて後あり

ありとて後ありて後ありて後ありて後ありて後あり

ありとて後ありて後ありて後ありて後ありて後あり

ありとて後ありて後ありて後ありて後ありて後あり

ありとて後ありて後ありて後ありて後ありて後あり

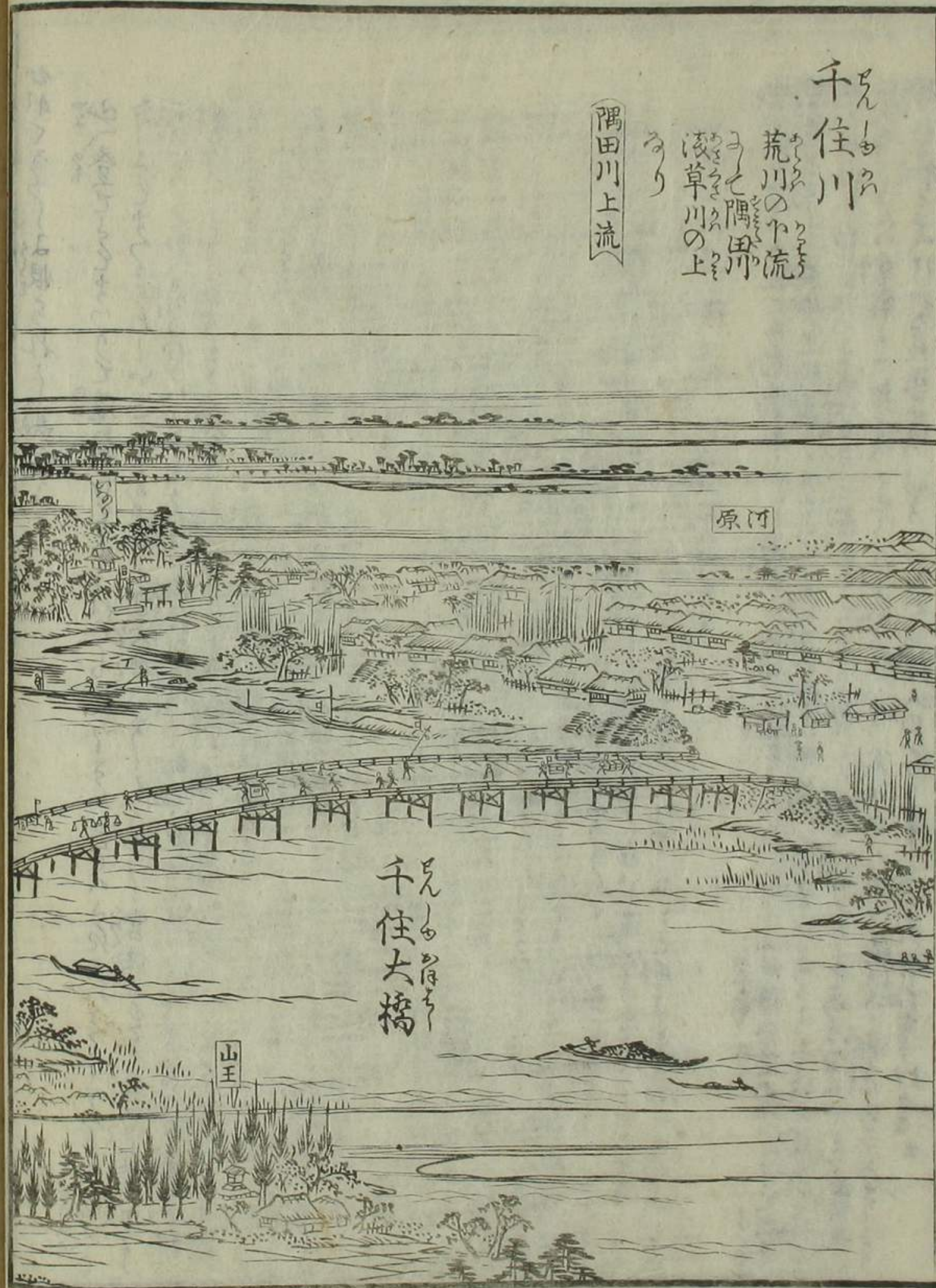
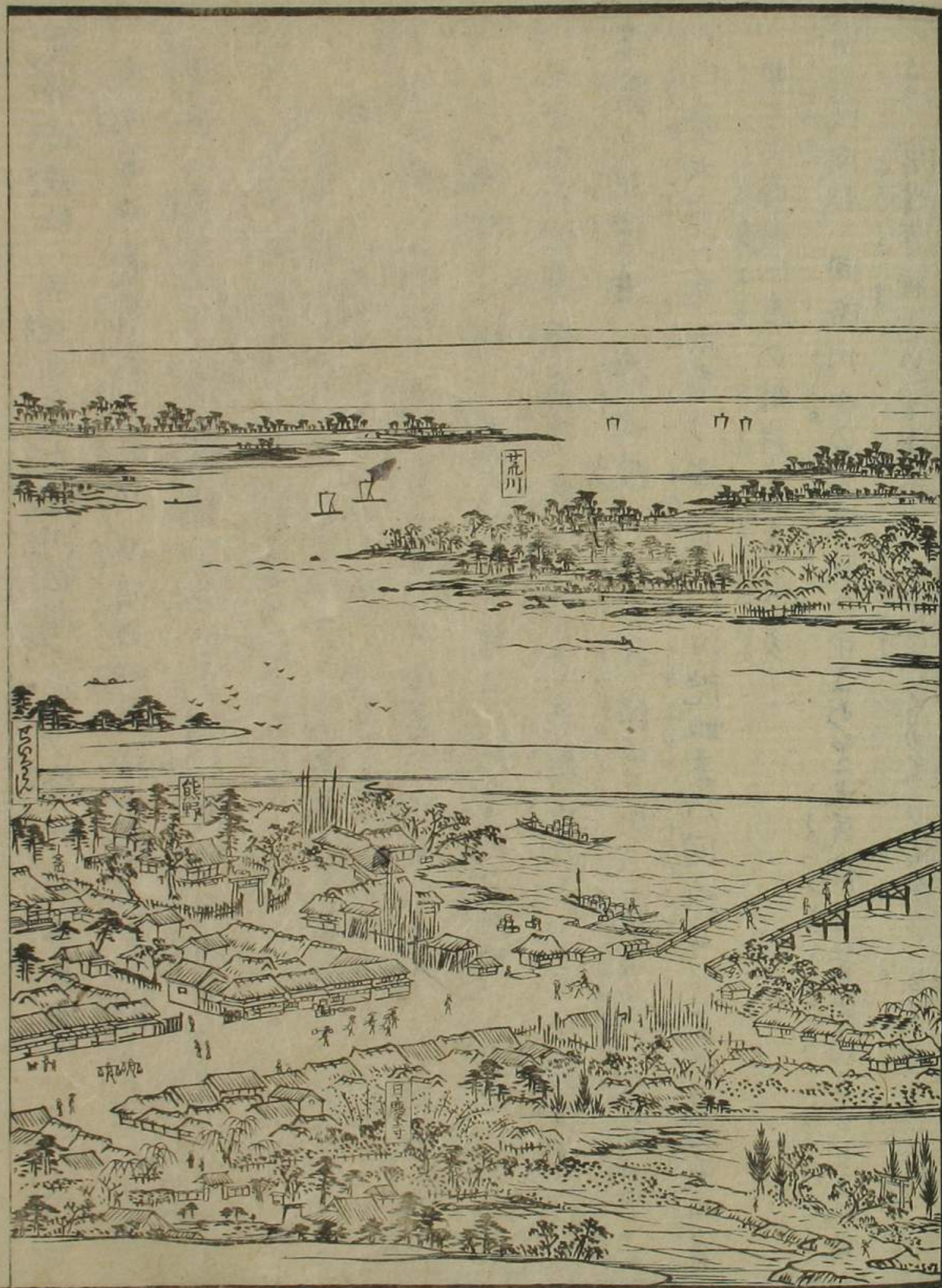
ありとて後ありて後ありて後ありて後ありて後あり

ありとて後ありて後ありて後ありて後ありて後あり

ありとて後ありて後ありて後ありて後ありて後あり

ありとて後ありて後ありて後ありて後ありて後あり

ありとて後ありて後ありて後ありて後ありて後あり



見ゆる
千住川
荒川の流
隅田川
隅田川の上
隅田川上流

見ゆる
千住大橋

熊野権現社 同北の方千住川の階よりあり祭神伊弉册尊一坐社傳云

永承年中義家朝臣奥州征伐の時此地より行灯を添へんとす

奇異の霊階ありなり鏡櫃に安じり紀州熊野権現の神幣を此地に

とてめて熊野権現と稱してす

千住大橋 荒川の流に架き奥州海道の咽喉なり橋上の人馬は絡環

とて向断り橋の北壹貳町を經り沢舎あり此橋の其始文祿二年

甲午九月伊奈備前守奉行とて普請ありしなり今も連綿たり

其露山延命寺 應味院と号し下沼田より真言宗の右刹よりて

行基大士の草創なり奉尊阿弥陀如來の同作りて六門阿弥陀第一番

日とて春秋二度の彼岸より参詣多し

富士浅間祠 同所川下の方深林の中より土民傳云昔此地より足立莊司

より宮城宰相といへる者あり一女子をとりて名附きて足立姫といふ

身四番阿彌起りの豊島を創つ所清光の女とす二番目縁起より沼田莊司の娘とす

三番目五番目とて六番目縁起より足立後二位宰相藤原正成の女とす

鳴石湯の耐るり者ありて城下りめんとして

縁起より沼田中補のりて送りてあり三番目縁起

余木の阿弥等の縁起よりあり

外此より故より是より随つて父母強き婚姻を誓ふといへり

患より竟り荒川に入りて死す

りり仍莊司悲歎し絶とて又村人彼女子等の行跡のなるを稱し其日

六月朔日のみあれといへり其霊を富士浅間と稱して一社に奉すといふ

ゆれとも其説未詳

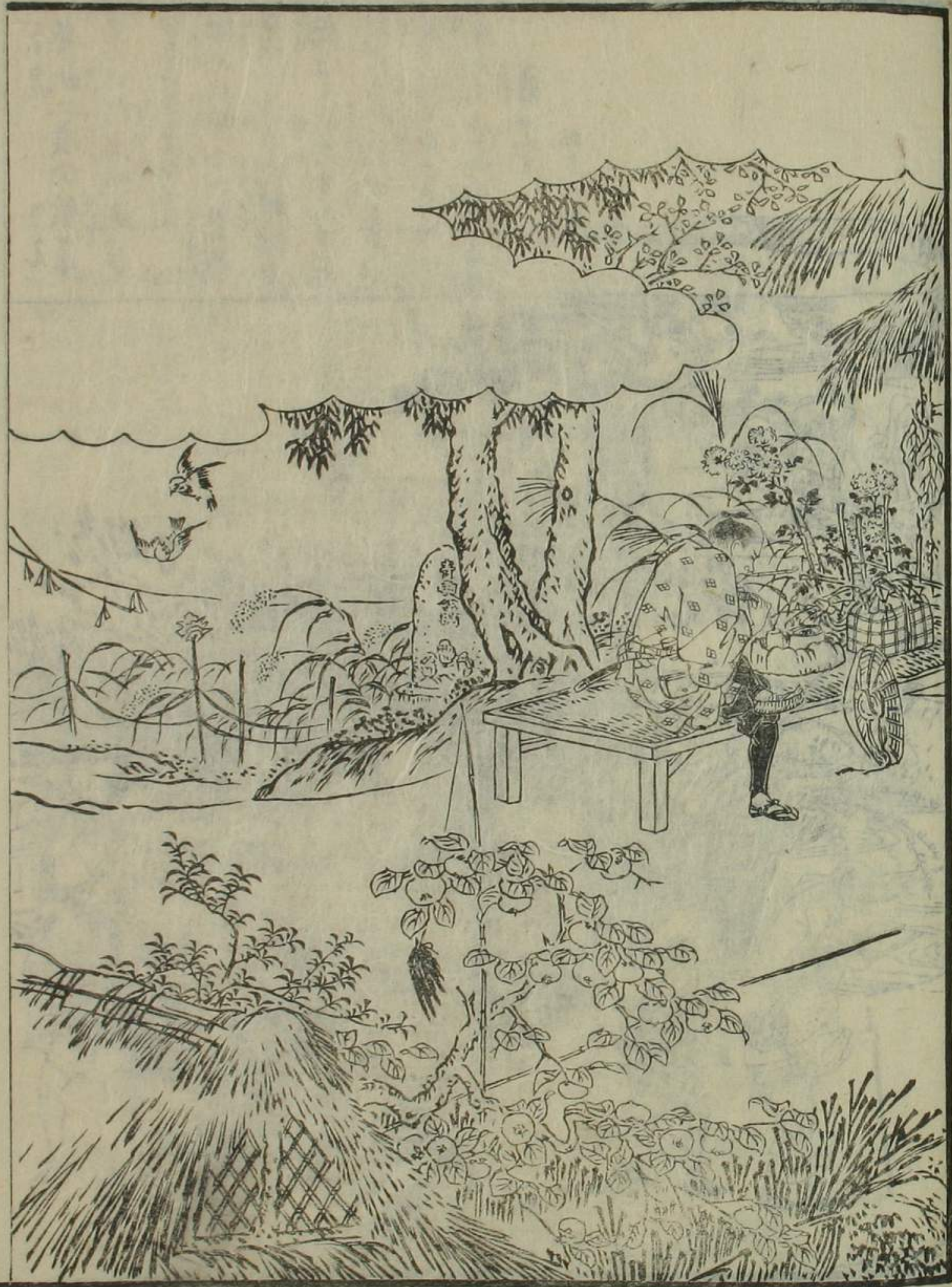
浅間淵 同所の河淵をさうとありて是を足立姫溺死の所なりといふ

十二天女 足立姫の侍女の死骸を収めて十二天と稱し船方村の鑑守なり

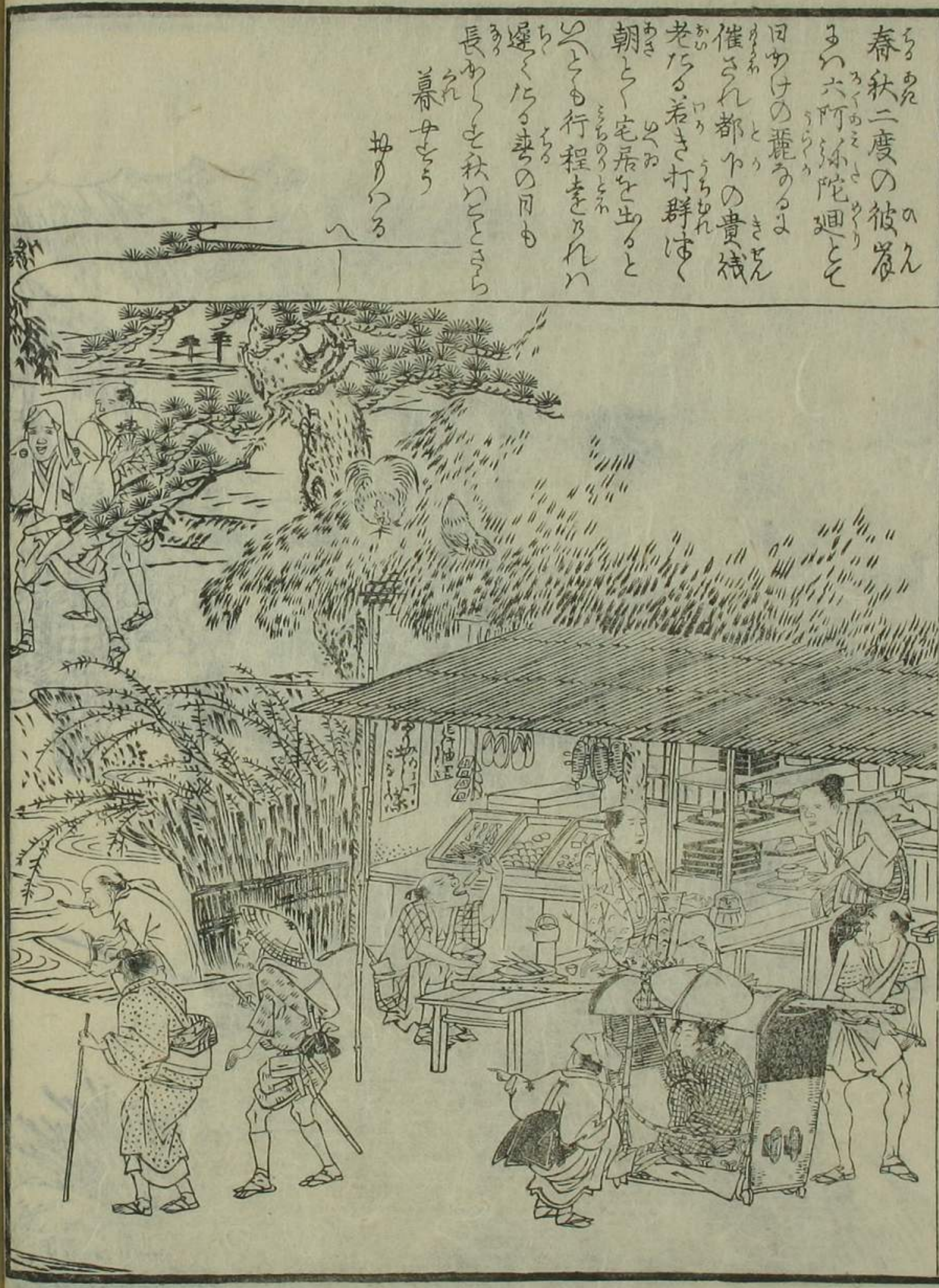
餘木阿弥陀如來 宮城村龍燈山性將寺より安じり往右行基大士六辨の阿

彌陀如來の像を彫刻ありしを餘材を以て是を造るにす草堂の

中より安置ありしを遷し後明徳の頃正譽龍吞和尚改り一字の梵刹とす



光茶銚 ひかりちやうま
 千住の驛とあれ せんじゆのえきとあれ
 道の左側とあり みちのひだりがわとあり
 土人の昔老茶 どこのむかしやうちや
 屋とも呼あり やともよひあり
 むろ 母店茶 むろははのちや
 銚の光澤の珠 ちやのひかりのたまご
 よ勝ちり よかつちり
 重んずる感賞 おもむくかんじやう
 あつかりし あつかりし
 此茶銚竟 こゝちや銚あき
 名物とあり なぶつとあり
 其名 そのな
 世 よ
 光 ひかり
 と と
 むろ むろ
 ありぬ ありぬ



春秋二度の彼岸
 多の六阿弥陀廻と
 田舎の麗あるよ
 催され都々の貴族
 老なる若き打群は
 朝とく宅居を出ると
 ひとも行程をりれり
 遅くはるまの月も
 長ゆくは秋の夕ぐれ
 暮やせり
 母のつる

此地に住しつり則此寺の宗祖たる當寺に足立姫の墳墓と稱するもの
あれとも詳なりと

五智山總持寺 西新井村にありて眞言宗より遍照院と号し弘法大師の

草創より奉旨弘法大師の靈像も同作るを靈驗著く毎月廿一日を

開帳ありて衆詣頗多し或人云尚書弘法大師の靈像のものを北總真間山弘法寺に安置ありて日蓮宗に傳はりて此像を弘法寺に遷すとす

阿伽井 其意強あり此井に依りて弘法大師の加行水ありて洗目服せり用る

八幡宮 六月村にありて別當を空天寺と号し傳云八幡左郎義家朝臣

奥羽征伐の時此國の野武士とも道を速る其時六月空天より味方の

勢勇く戦むとする氣色ありしより義家朝臣公中又鎌倉八幡宮を

祈念ありしり不思議に大陽鏡如く光りて背より交りし敵の野武士本日

小川の故に眼くらと大に敗北し依りて此地に八幡宮を勧請ありしと此

故に村を六月といひ寺紋空天と稱し又幡正山と號すとあり

白旗塚 伊奥村田の中より傳云往古八幡左郎義家朝臣奥羽征伐の時

此地に白旗を建凱牙を唱へし此ありしと近頃近此塚上より小祠あり

其傍に立寄りのありし崇あり故社荒廢しをひりしり其傍に再建も

とせしり今塚ありを存せり今此塚の上は此辺の田面を白旗耕地と

いふ又燈塚と稱するもの五箇あり燈首實檢あり後其

萬徳山明王院 梅林寺と号し梅田村にあり新義の眞言宗より奉尊に

比翁菩薩を安んず寺記云當院元基志古二郎先生義廣八幡左郎義家

の孫六條判官為義の三男あり治常陸國伊勢守住後同國志を村にありて初武列

榎戸に一院を創基し祈願所とす當院見あり昔は是より先治承の頃頼朝初

く義兵を起すの時義廣自立の志あり故に頼朝に隨ひて初小山小四郎朝

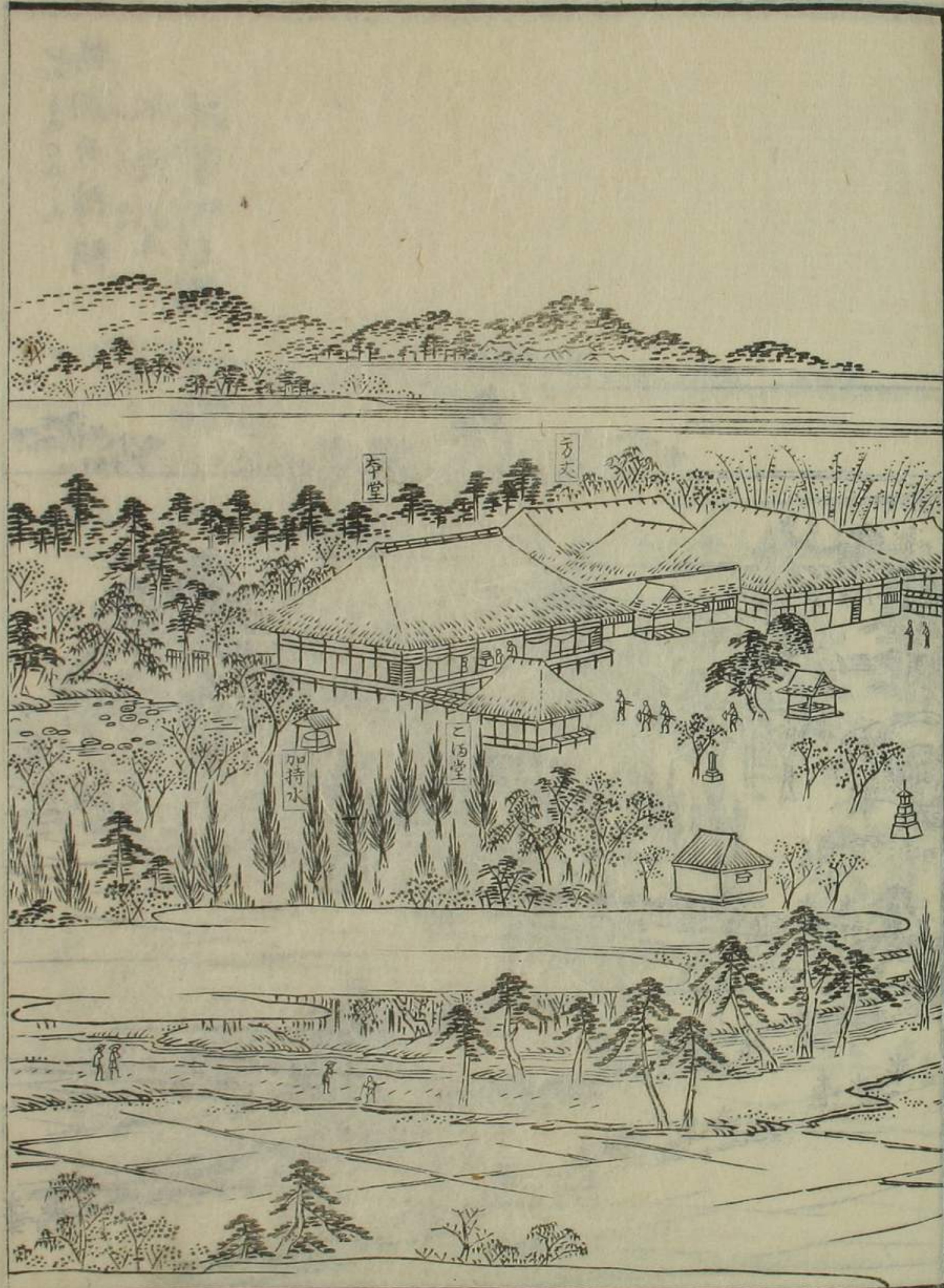
政が爲に敗らる其後同左馬女義純義廣三代 蟄居し此梅田村に住す

外右の方と稱しと當りて其姓を其裔常陸久廣 當院の傍に始りて天満宮

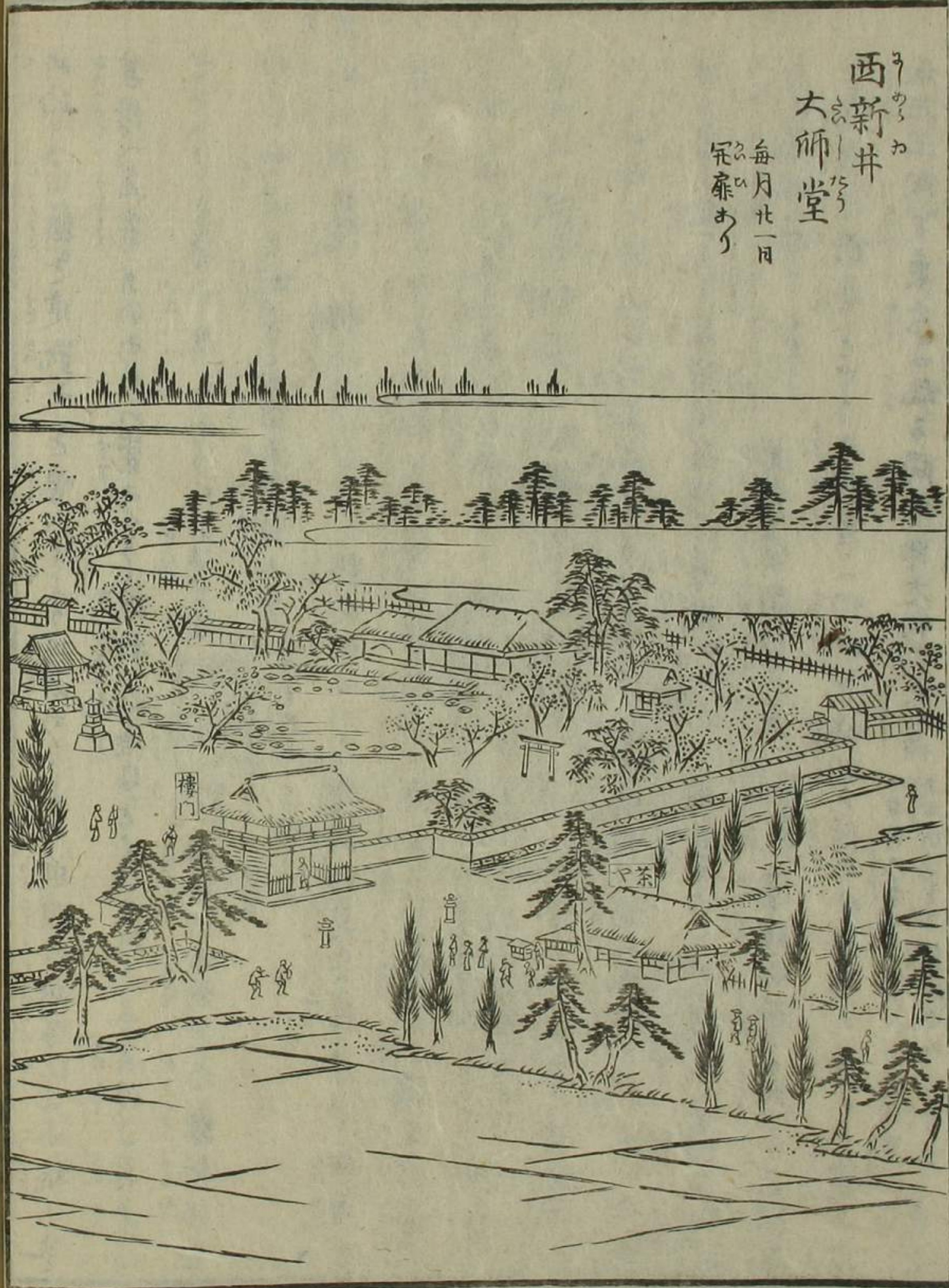
義純の才宅の地ありしとありを勧請し鎮守とせり又神告より姓を梅田と改め小右郎と号し又遠く後

永正年間関東大に乱る同左郎左衛門久義小右郎久廣より十六代の孫同帶刀

是を



西新井 にしにい
 大師堂 おおいしだう
 毎月廿一日 毎月二十一日
 完葬あり 完葬あり





梅田天神祠
 不動堂
 別當明王院



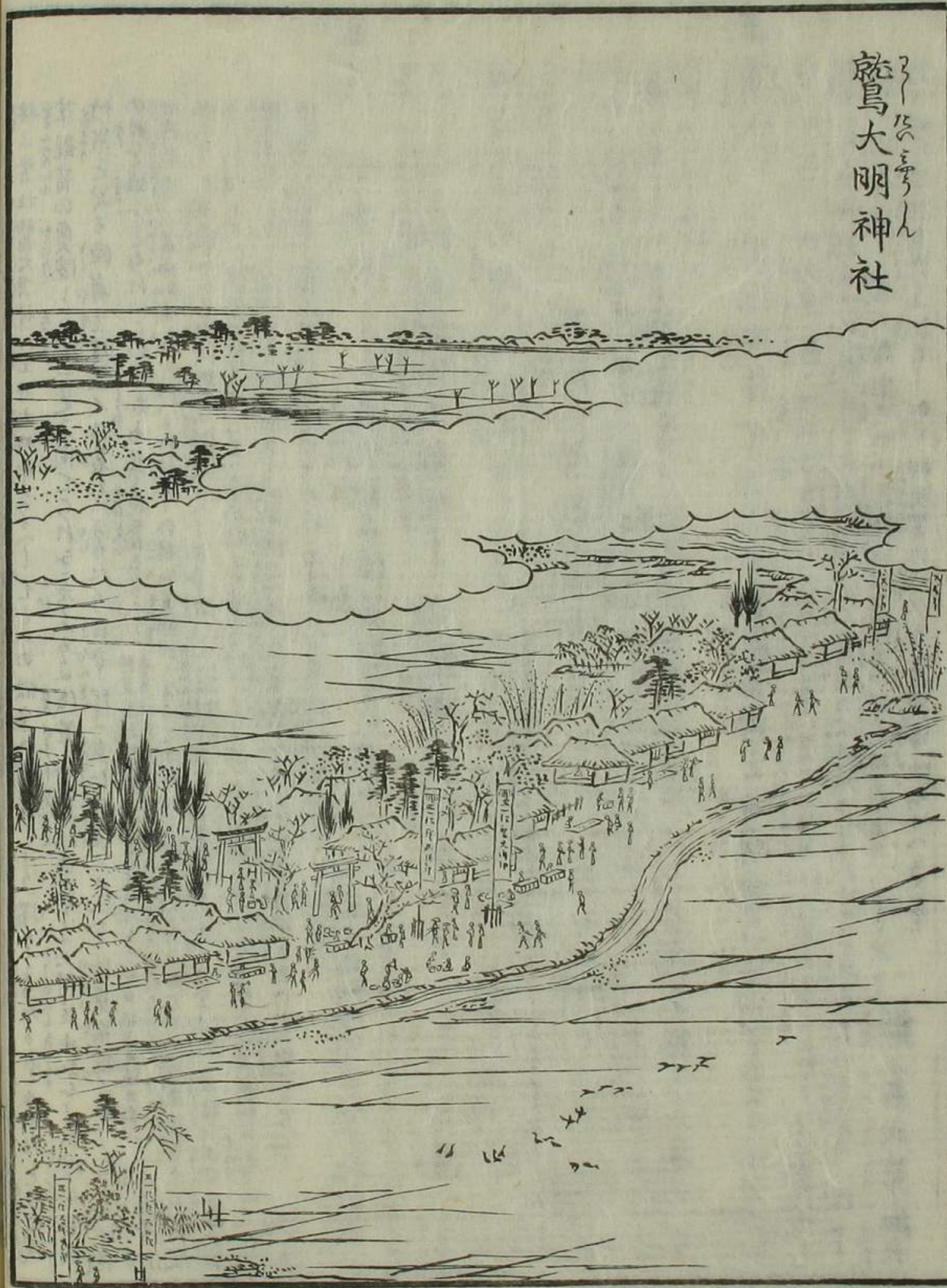
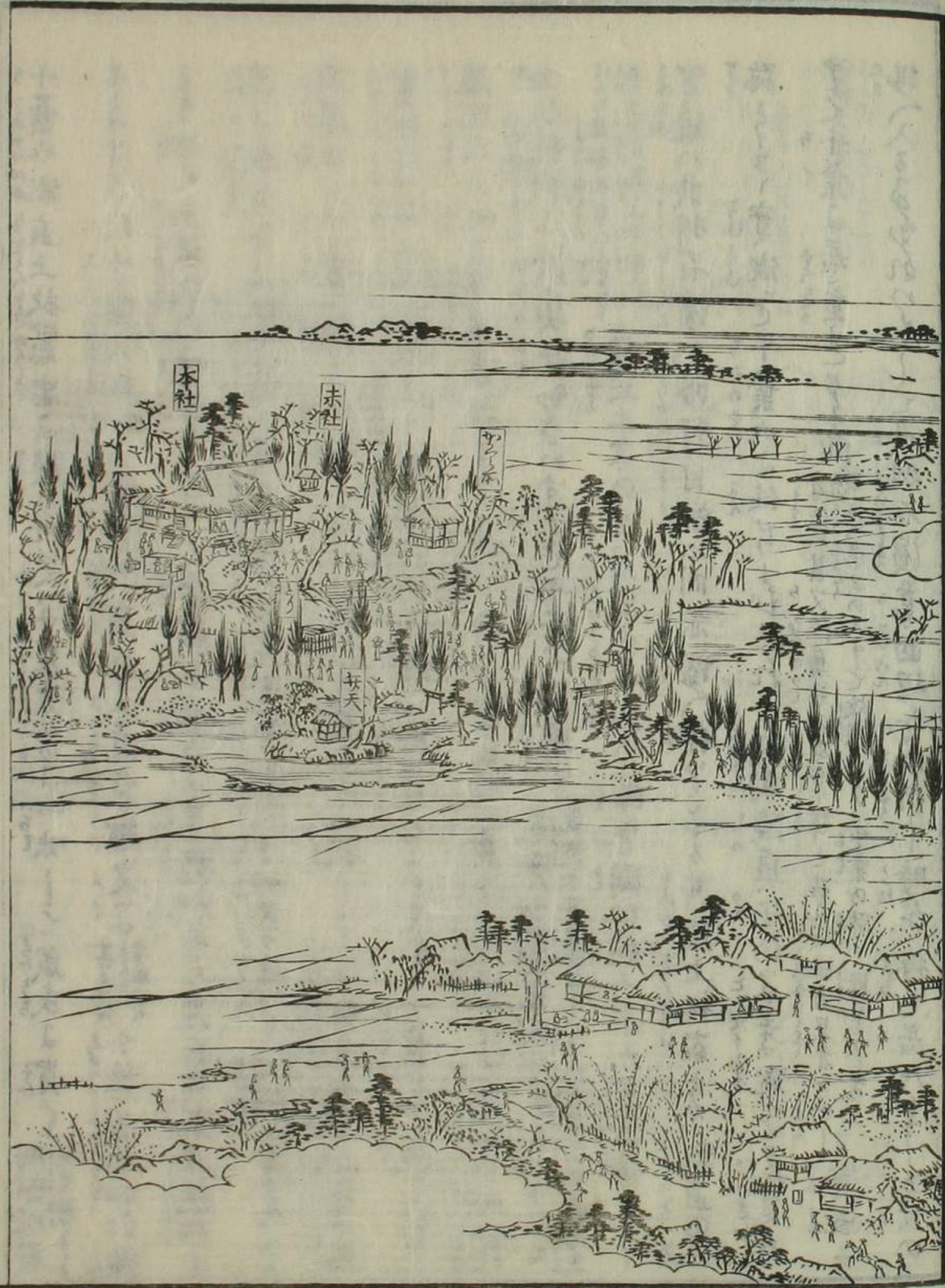
厭ひ丹別嶋材城は移り住し又同國峯山城は移り住しとて遂に敵の
為に生害と 長子久頼を以て久友 其後國民當院に亂入し遂に破壊を以て
しを慶長の頃頼專坊 久義のいま 今の地は迂して寺院を再興し真知法印を
以て中興定山とすと又寛永二十年の春 大樹 御放鷹のまきり

不動堂 本堂右の方より本堂不動明王に法大師の作りて覺鑿上人根末傳法院草創あり頃
護摩堂の本堂より女並ありて天正三年故ありて花洛敷中山清保寺に移し奉り又寛保元年
不思儀の靈感ありて仍る
天満宮祠 不動堂の後の方小丘の上なる古松の
正一位 龍馬大明神社 花亦村にあり此地の産土神とて祭神詳るると奉祀を釋
迦如來より龍馬に乘さる醉相あり別當に真言宗より正覺院と号を

毎第十一月兩月以て祭日とせり縁起曰奉祀如來尼如來の新羅三郎
義光崇毅の靈儀より天喜の昔奥列女倍貞任叛送を企るの時奉りその
示現より其軍勝利ありし由を記すも其説詳ありと

石濱 今橋場といひ義経記に治承四年九月十一日 東鑑に頼朝陽田川を戦て武藏國より
あへり右大將頼朝御下總國より武藏國へ打紙ありとある奈介は石濱と申
処より江戸を降り知行ありと云 按し同書に江戸を降重長八箇國の大橋長者とあり 則ち
も一考は所領のうちに其のちらて 重長八箇國大橋長者とあり 則ち
るしと云えん 其後千葉家の所領とるを代々其之を知行せしむる 永禄二年
奈介の右文をよき田新六郎同大橋亮 不領の中に千葉石濱の名を如たり又本内宮内少輔石濱の今津
を領し或は倉や寺の領も附する 記すり今下寺の徳泉寺の境内宮内少輔此地を領せし石濱地所の
許はすひららり

石濱城址 其地今さうらうと事跡合考し神明宮の北の方ありとあり 按し
普門院供養の沼隅田川に淵のふと事なる文中に普門院右の隅田川の勝の嶺中ありと云 普門院を
別子より自前創立の地なりと三勝の地も又葉家の不領たりし小田原北条家の右文書に詳るり
之勝の地は荒川後流川の下流隅田川に合流する所なりと云 鎌倉大草紙云
後流の事跡合考し記す 如く神明宮の北の方の地止るべきと



鷺ノ島大明神社

千葉胤直上校憲忠と諍りて又子兄弟共々一味して成氏と背く
 成氏は馬加の陣
 ちよまの故千葉大助備亂る二男陸奥守入道常輝又子其の父下總國馬加の陣
 たり打と出成氏の味方となりて合戦と竟り亨徳四年三月廿日胤直敗北
 其子胤直を以て千葉入道常瑞吉舟中勢入道了心等悉く切腹とより
 陸奥守ハ千葉へ移り千葉の跡を継ぎ然るに上校よりの中誓入道了心の子息
 實胤自胤二人を取立下總國市川の跡に櫛籠らよを以て千葉家二流とれり
 總列大に死る其頃京都を東下野守常陸陸奥守退治とて馬加の跡に
 向ひ攻戦ふ陸奥守ぬすくと千葉へ引退く常陸の千葉は常陸の六男東六郎を大
 陸の京師の命を
 常陸の千葉は常陸の六男東六郎を大
 陸の京師の命を
 康正二年の正月成氏市川の跡を圍む同十九日落陣し
 實胤ハ武列石濱へ落行自胤ハ同赤塚へ移る其後上校家より胤直の一
 跡より實胤を千葉に任じむされと成氏陸奥守の子孝胤を長負め
 して千葉に居並せむ間孝胤ハ其父陸奥守入道常輝と共々故胤直兄弟を亡
 成氏ハ奉公の人なり故成氏より千葉の跡を賜ふ實胤を
 城へ入るゆゆれりとして武列石濱舊西辺を知行一時を待て居たり世の

鷲大明神祭

毎年土月箇の日は
 修めす世々の
 近々の農民衆
 秋を祭終るの後
 悉く浅草寺観音
 の堂前へ移りて
 舊例とす



中を述懐し濃列と采居と依り上枚家より寶胤の跡を兄の自胤に賜ふ葉女

又任を是を武列の千葉と号す以上藤倉大草紙の

南朝紀傳云丙子康正二年二月千葉の家も成氏と上枚と相論より

二より唯胤と園城寺の某武列と類く云

梅花無盡藏文明丙午隅田河詩註云隅田在武藏

下總西國之間路傍小塚有柳道灌公為攻下總之

千葉構長橋三條云

同書便面題詩註云八景或雪護獻千葉蓋上總

下總千葉所管也今寓武列者與上下總之千葉牙

看一月分爲二灌公放在武者

雪月碧湖煙雨後漁歌鐘色送飛鴻

片帆千里賣花市上下總飯君握中

蓋祝萬武之千葉惟種也

又東國古戦録小田原實記等の書より葉大助備胤の成子北總馬加の博士陸奥守康胤異母弟惟胤

と胤督をありて康胤打務を總領を授けし宿老の山崎寺元馬及び即惟胤をいさるひに戸

のよりち田道隆を庇護し頼朝の道隆より高きより微力ありをあらはれし石濱の成とすつて是を守

らむ其後惟胤自身あり其子以郎胤利あり上枚朝貞より任へり南方のより返れて戸

跡を退去し後北条氏康の旗より属し石濱近辺の所領を安堵し跡を胤宗より譲りしと天正元年

癸酉十月右行の御所義氏下總守の跡を授けし胤宗討死を依り其後石濱の千葉あり女子の

男子ありより氏改のし知れしと北条常陸公氏繁の二男を頼りしと書合に即胤村と女葉

女子の遺跡相續るよりし知れしと本内上所とある者より頼朝の胤村と女葉

宮内少輔支配あり其頃石濱領四千貫ありしと知れしと頼朝の胤村と女葉

頼朝の胤村と女葉

頼朝の胤村と女葉

頼朝の胤村と女葉

頼朝の胤村と女葉

頼朝の胤村と女葉

頼朝の胤村と女葉

頼朝の胤村と女葉

頼朝の胤村と女葉

頼朝の胤村と女葉

頼朝の胤村と女葉

頼朝の胤村と女葉

頼朝の胤村と女葉

頼朝の胤村と女葉

頼朝の胤村と女葉

頼朝の胤村と女葉

頼朝の胤村と女葉

頼朝の胤村と女葉

頼朝の胤村と女葉

頼朝の胤村と女葉

頼朝の胤村と女葉

頼朝の胤村と女葉

頼朝の胤村と女葉

頼朝の胤村と女葉

竹の
紫の
ら
も
一本
茶
系
芭蕉



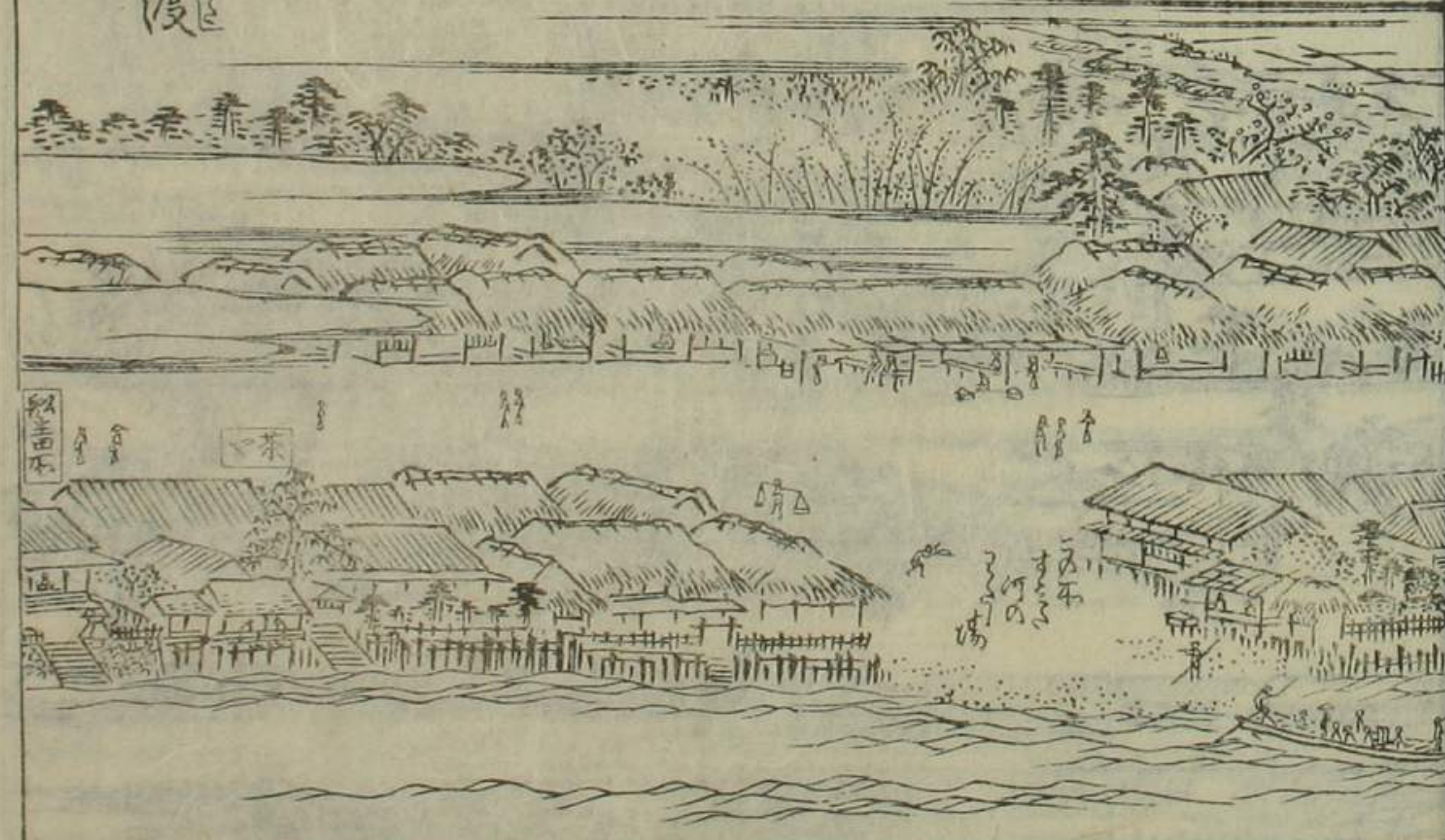
石濱
神明宮
隅田川西岸



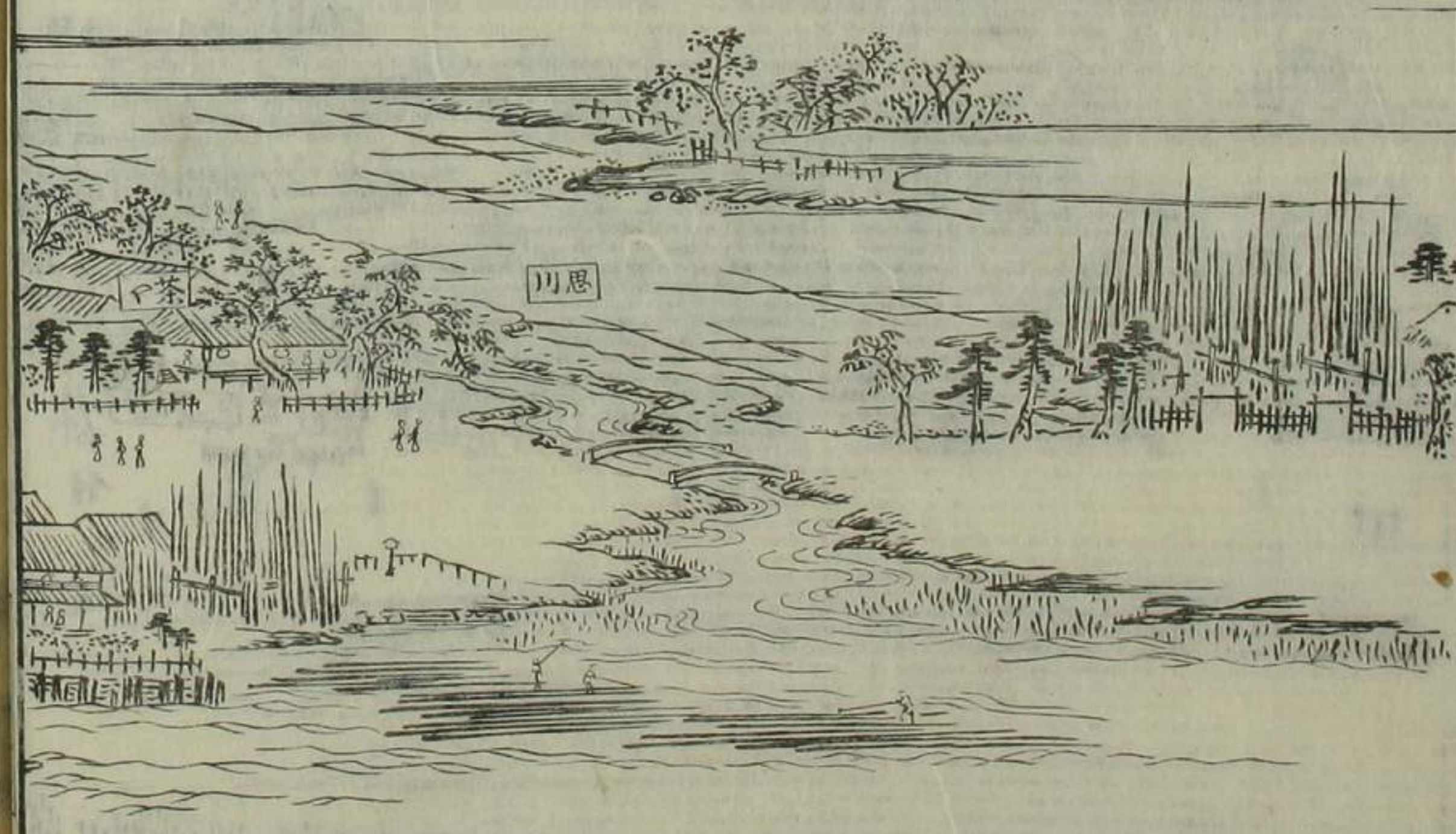
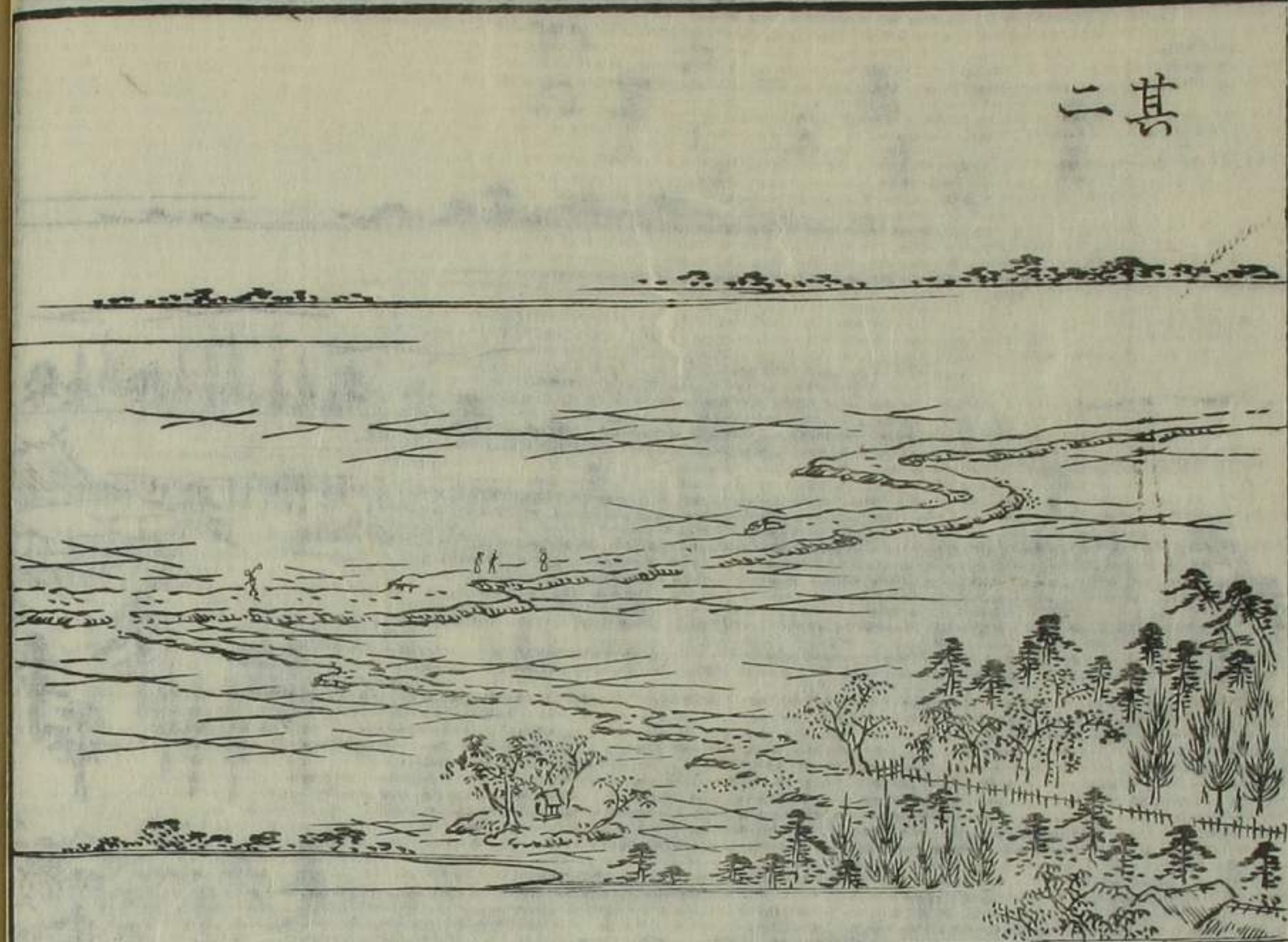
うき旅の
 ころよ
 流るる
 川の
 水の
 洞の
 道真准后



恩河
 橋場渡



二其



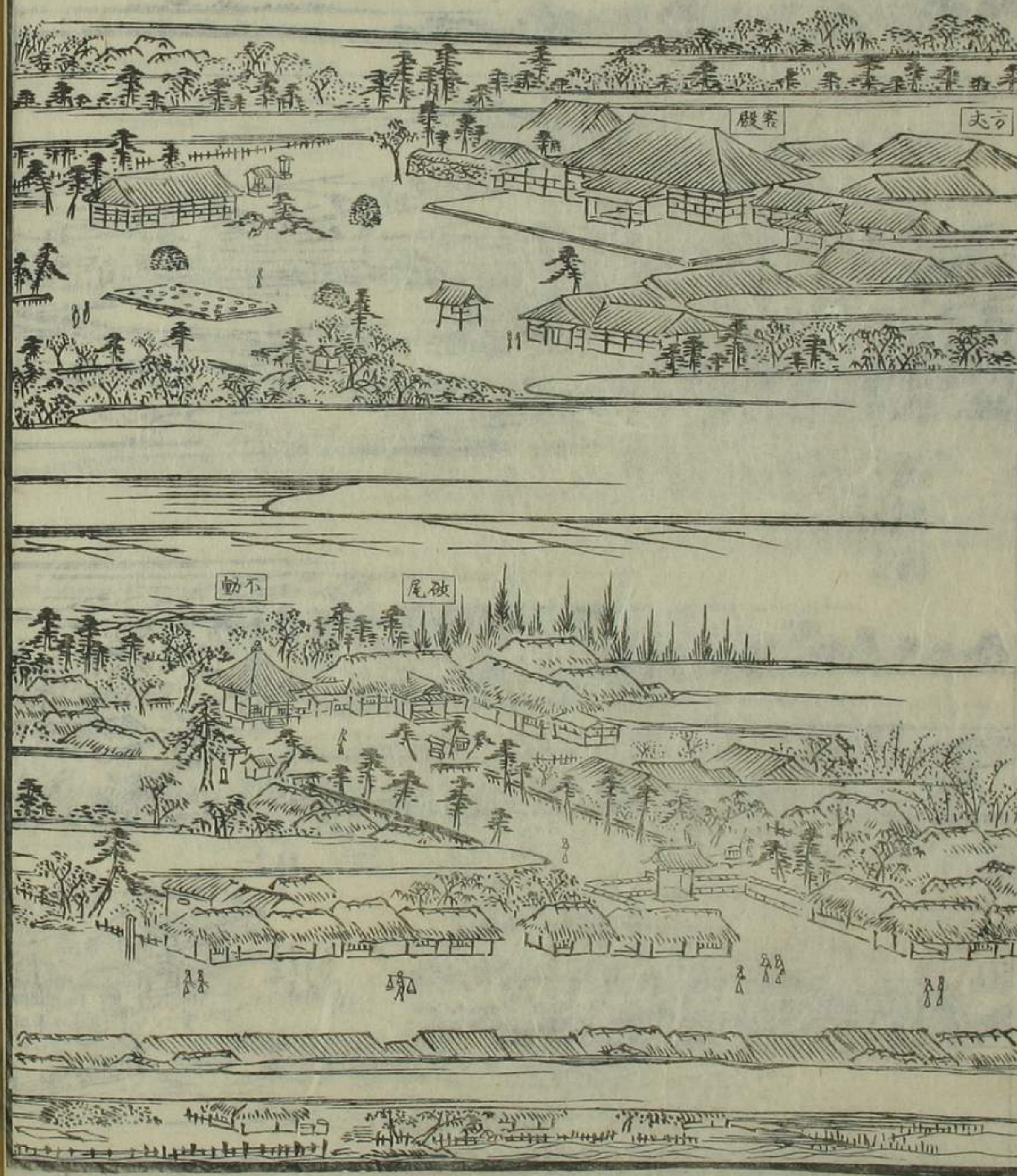
其二



總泉寺
大門

此
邊
在

總泉寺
不動
尾
藥師



殿

大

不動

尾

泉



海芽の
原の
焼
の
か
の
其角

玉振の原

其角

原の茅葺

玉振の神社
海芽の原
玉振の原

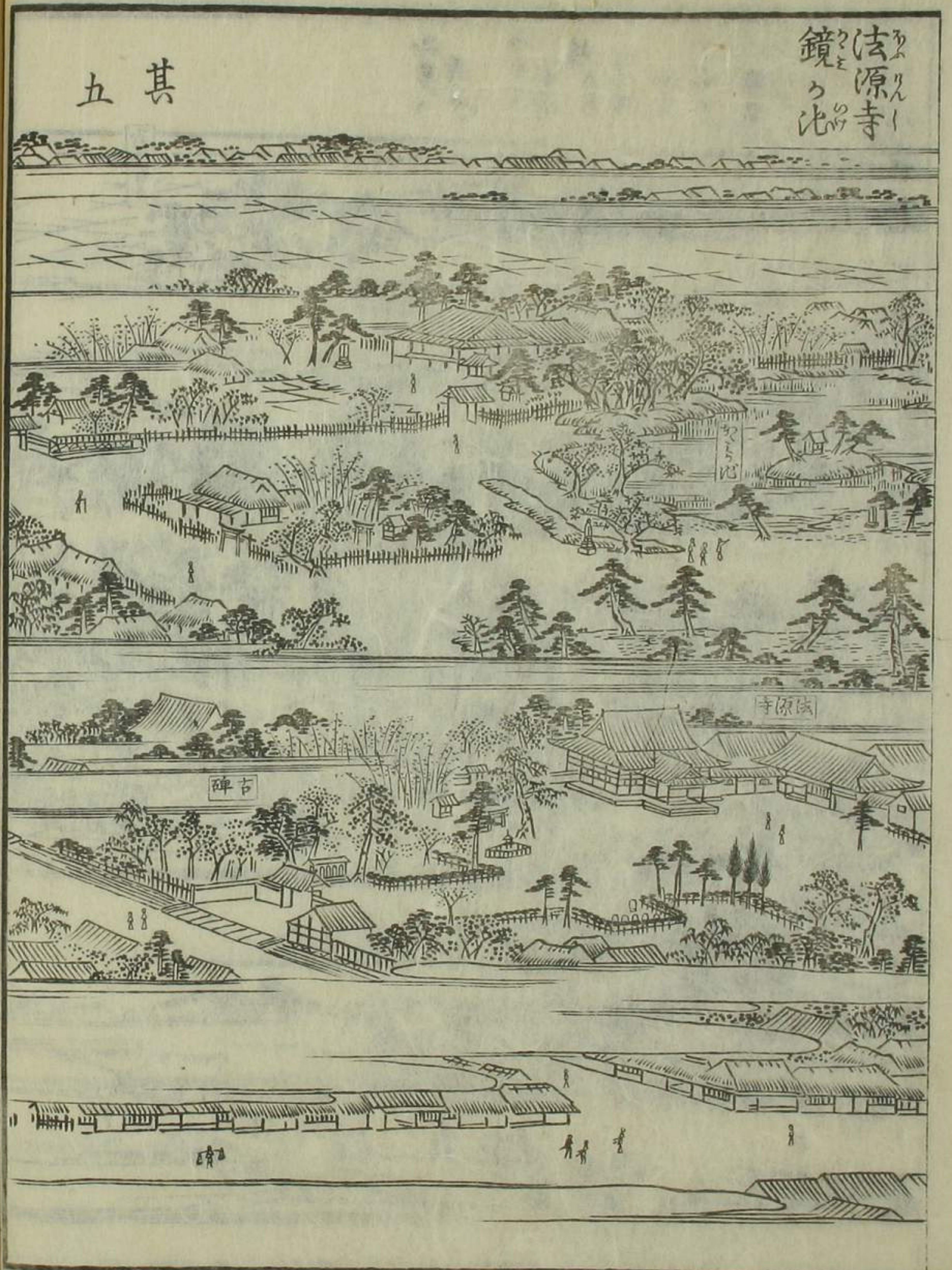
其四



人々
あはれ
御
夕暮れ
海芽の
原の
霜を
は
道真准后

此辺
羽庄

法源寺
鏡池



其五

佐殿神ありて仰られ本井隅田を打越て板橋を着あふとあり隅田河に
海村ありしもの義経記の
交義もともあり
夫本抄

隅田河にむかしと今とての身を浮橋のある世ありて中礼 光俊
其言を載すいふ此言の載え元年鹿島社よりまうとて今角田川の渡とされ彼より今浮橋を
つらなをけれとあり又

梅 花 無 蓋 藏 詩 註 云 隅 田 在 武 藏 下 總 千 葉 構 長 橋 三 条 云 云
傍 小 塚 有 柳 道 灌 公 爲 攻 下 總 千 葉 構 長 橋 三 条 云 云

按て深平盛衰記とて光俊鹿嶋記行等の書に載る所の後初より今までの橋ありて深平盛衰記
をひを平記等其餘の書にも橋場の名をいふと橋場の字をさうく道灌下總の公を載る頃
より深平なるを南河原と云く隅田川の橋場より一所より川上より一所の古橋水底よりのこと
舟代のもまよふことあるとされ其橋の頃の頃の名と云ふは考ふに今この言は橋とて
一所の川上神明宮の大門の通り其舊跡のありきと云ふは里老傳りの此地は深平大門の通りをい
今の川上橋より南の方監船所のある所より一所の橋場の旧跡ありと云ふは考ふに今この言は橋とて
或は伊勢の神宮ありて或は倍小橋場
或は伊勢の神宮ありて或は倍小橋場

朝日神明宮 橋場よりあま石濱神めとも
神めとも早く祭神伊勢と同く内外両皇古神宮成斎まゝる社傳云云

人皇四十五代聖武天皇の御宇神龜元年甲子九月十日鎮坐と云
牛頭天王社 幸社のたのふあり橋場の祭守と祭礼の毎六月十五日あり世に汐入の押合
祭として神樂今戸橋をわたりて氏子の輩らとて神樂早まき其神樂は

龍田河渡

名子

あけ

うさ

うさ

官人

都鳥

家

うさ

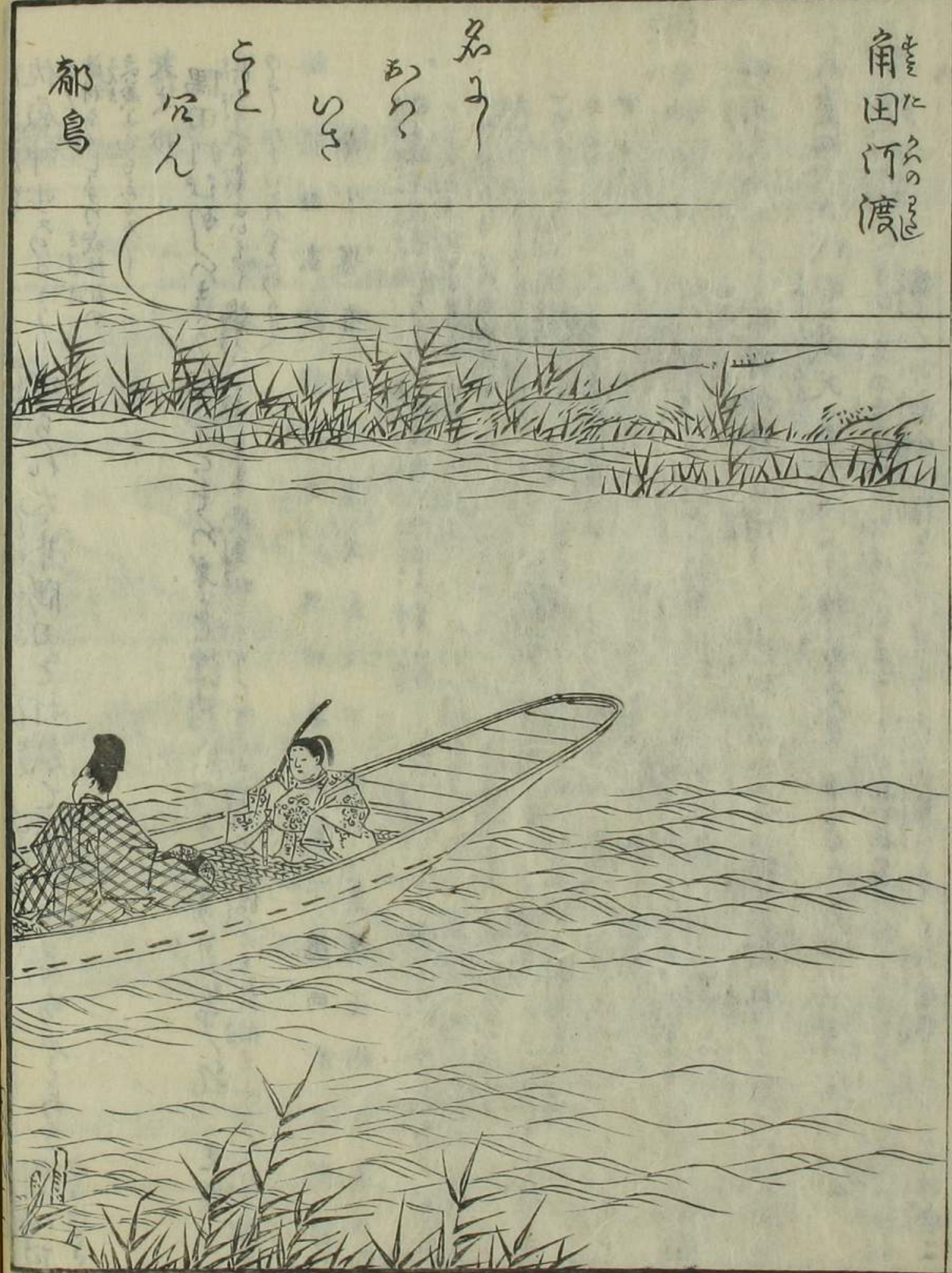
ひさ

あけ

うさ

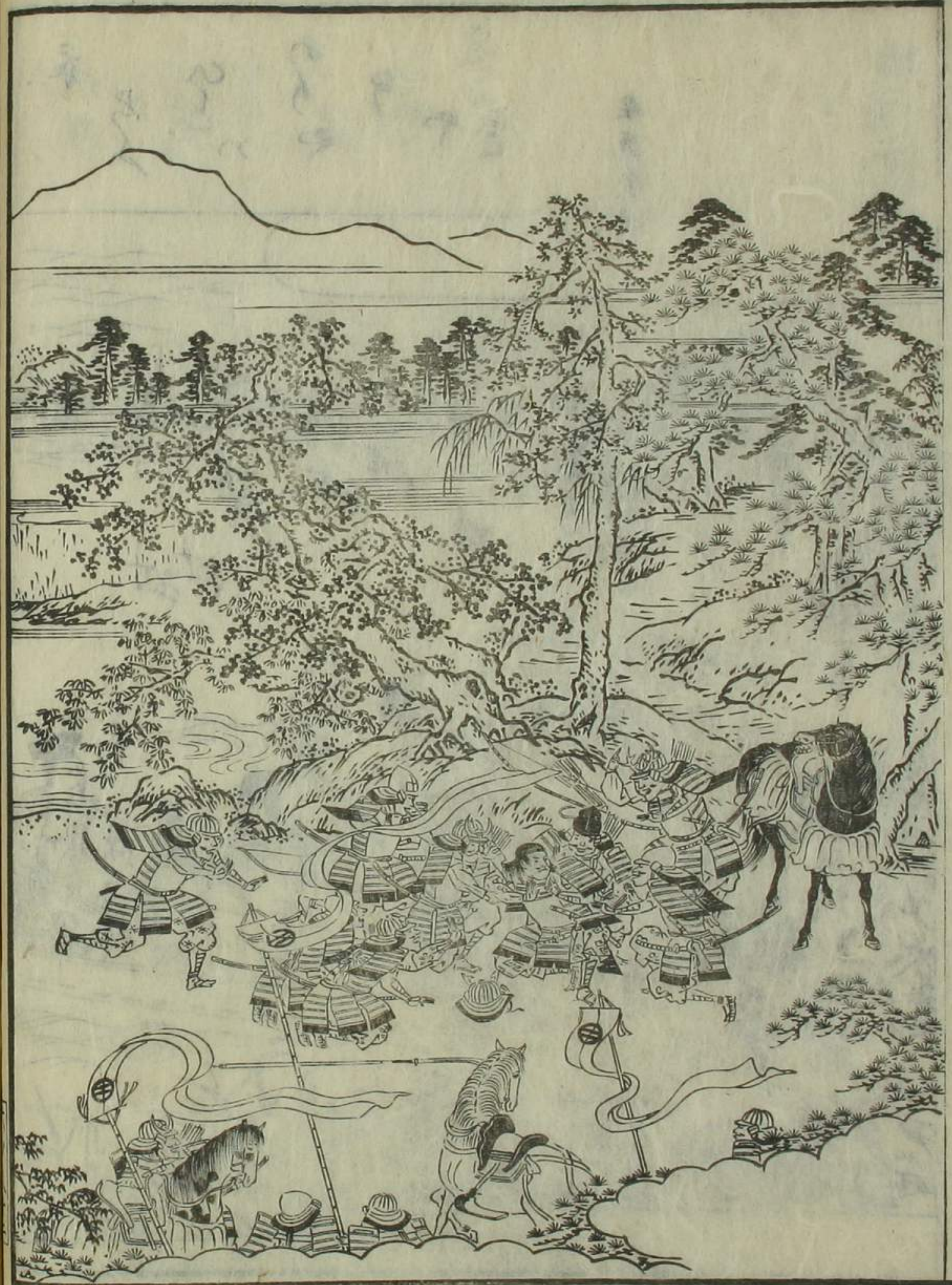
とや

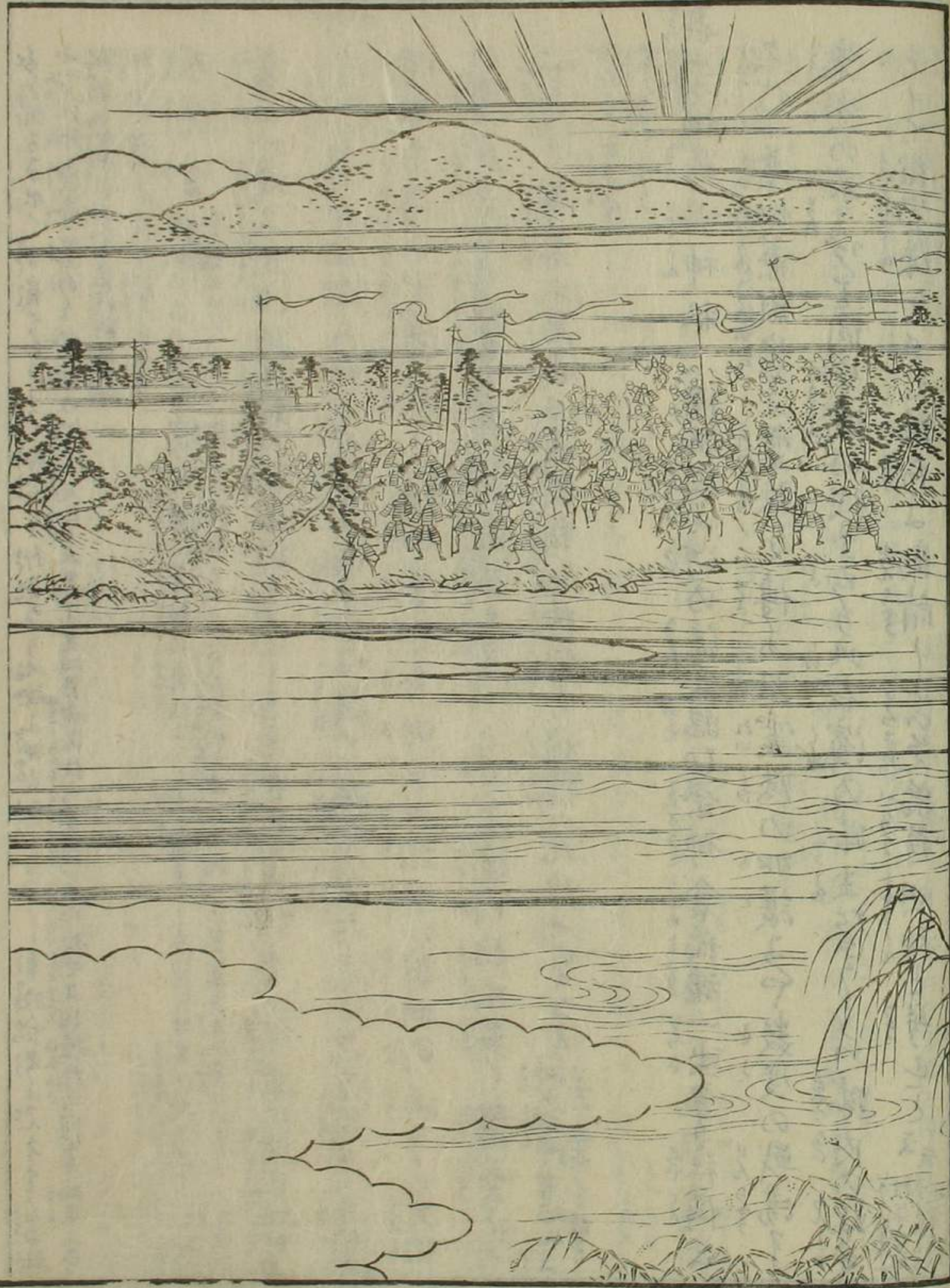
在原業平



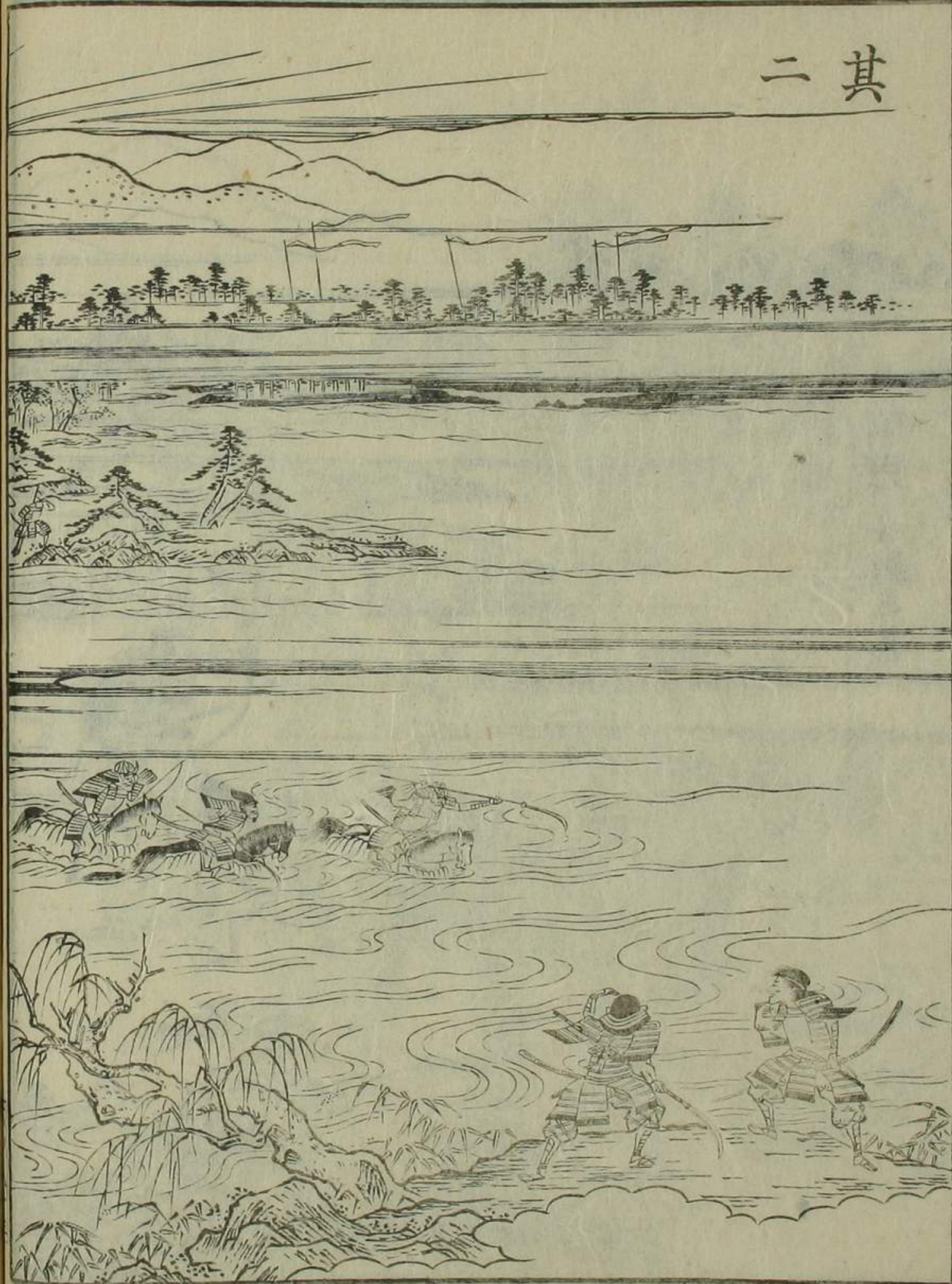


正平七年
隅田河合戦之図





其二



よの着相實有の草を拂ひ言下の一喝よの異學狹鮮の塵を拂と公案
の床の前よの一千七百の則を重て以公傳公を傳く坐禪の衾のりよの朝之
暮四の助を得る文字言句の話頭を離る

淺茅原 總泉寺大門のありをり

田圃雜記 浅茅原のありをり
人めさへめれし林の夕まぐれ浅茅原のありをり
道真准后

妙龜塚 妙龜堂のありをり
古墳一基 妙龜堂のありをり
長三六あり
碑面蓮花の上田圃の中法所し

鏡り沈 同所西南の方あり傳へ云妙龜尼梅若丸の跡を去る京よを

さる梅若丸身まぐれを寫し此沈又身を投てむれ
傍小鏡沈庵と号る小菴あり

辨財天を女と是も妙龜尼をまつるありとあり

祭装懸松 沈の傍あり一名を女めけ松とあり妙龜尼の松の松をくわむれ
采女塚 采女あり實文の頃吉原町より移れとあり花女とあり故ありと夜よまされて
小袖をりく一着のありをり

名をそれとありとあり猿渡のありをり
東野先生之墓 同所橋邊の通り福壽院とあり禪杖あり先生の諱の燦圖東壁を
南郭服夫と述る所あり其文あり

歸命山法源寺 毎量壽院と号を浄業の古刹あり總泉寺の南に隣り

宝龜元年庚戌の春智海法印始て此比く大日堂を建立と其の後延暦
三年甲子の秋村里の人民力を合て一字の梵刹とあり砂尾石濱の道場

と号く 十五日歸寂とあり三世惠海法印の孫衛元年甲戌四月十五日歸寂とあり
隆性院後二位菰原朝臣四辻有理卿墓碑 天六月廿七日とあり南向亭云青石

其末由もあられやと云寺傳もとありはまのあり

按し知譜地記に西園寺大改大風経の四男四女権大納言三佐實藤より十五世の孫権大納言三佐實藤
延宝五年丁巳六月廿七日薨を六十八とあり實藤の女貞より永仁の間の人ありて四辻の祖なり延寶と一時世
大はなり居り居り後二佐の位有るなり延寶八年の五年己巳の誤なり八まを先きの月日
附合せりされと文を判決して讀むべし後後の出づるまのの
齋藤孫別當實盛墓 日ありあり石塔の僧形念持を十一の像を雕り東に條系院前九念五世
後五位徳山覺道真の大臣土壽永二癸卯年九月七日と刻しまの寺跡七世の住
保法上人元泰和尚元禄七年甲戌五月廿一日夜靈夢を感し孫兵衛助信利を建立せしを記せり
法書上人の實蓋の氏族ありより南向亭茶話よえたり法名の其頃刻し命しるると実蓋の壽永二年五月
實則後叙

鎌倉権方夫景道石塔 日ありあり碑面而阿弥陀佛佛德樂延久二庚戌年十月廿二日とありて立輪の石塔
あとの造らばありん景道の領守將軍良兼四代の孫九郎の爵致程の二男村田小五郎忠通のまあり
其宗當寺歴代住持の石塔なり仁壽昌泰正壽壽永康元文永弘安正嘉元正和文徳正慶文正の年
号を刻し一石の頂つれも印塔の中よりあり
されとありの故あり近年散失しとあり

當寺の天台宗の古跡ありて保元年間中興して保之寺と号しり通の後
大は荒廢せし明蓮社總管上人西仰和尚の時より天台宗を改めて淨家

小樽に其時より文字も法海ありにり寺院再興ありと云
を載し今其時より文字も法海ありにり寺院再興ありと云
色林郎の五字をあらわし重く康平二年武列保之寺とあり右讀あり證しるなり

深榮山長昌寺 法源寺の南に隣る當寺の御府内日蓮宗の古跡ありて延山

小属に之を冠山日寂上人の始淺草寺の住職より上右の天台の法流を汲り

寂海法印と号せりり弘安二年己卯所より於て日蓮上人の弟子日常上人と

宗義を討論せり或る日宗論あり弘安五年壬午ありと云
延山に登りて宗祖上人の謁し弟子の禮を執り名を日寂と改後淺草寺

歸を金龍を辞して庵をひひ妙昌寺と号ありて隠る後所の西僧由

又とも小受戒して月増日可と改む同九年丙戌十一月一日日寂上人歸寂と上人の

墳墓境内より中を依り其後日増 日可 日内房 精舎を搦場の地を建て

長昌寺と号し當寺新鑄の鐘の銘より其地元隅田町に接し偶水難を罹

堂塔漂流鐘亦沈没と其所を鐘ヶ淵といひ鐘より元亨元年辛酉寺を今

の地は猶もとあり
按し鐘の淵の末由は電戸村普門院の鐘の流る由ありとありて鐘の淵を
宗論 半堂のまはありの扇の形より作らるる鐘の中央より一棟ありて鐘の標石を建

世に示さんためなり

今戸八幡宮 今戸橋より一丁より北の方道よりをたわのり祭神山跡圃石清水

今戸八幡宮 今戸橋より一丁より北の方道よりをたわのり祭神山跡圃石清水

今戸八幡宮 今戸橋より一丁より北の方道よりをたわのり祭神山跡圃石清水

今戸八幡宮 今戸橋より一丁より北の方道よりをたわのり祭神山跡圃石清水

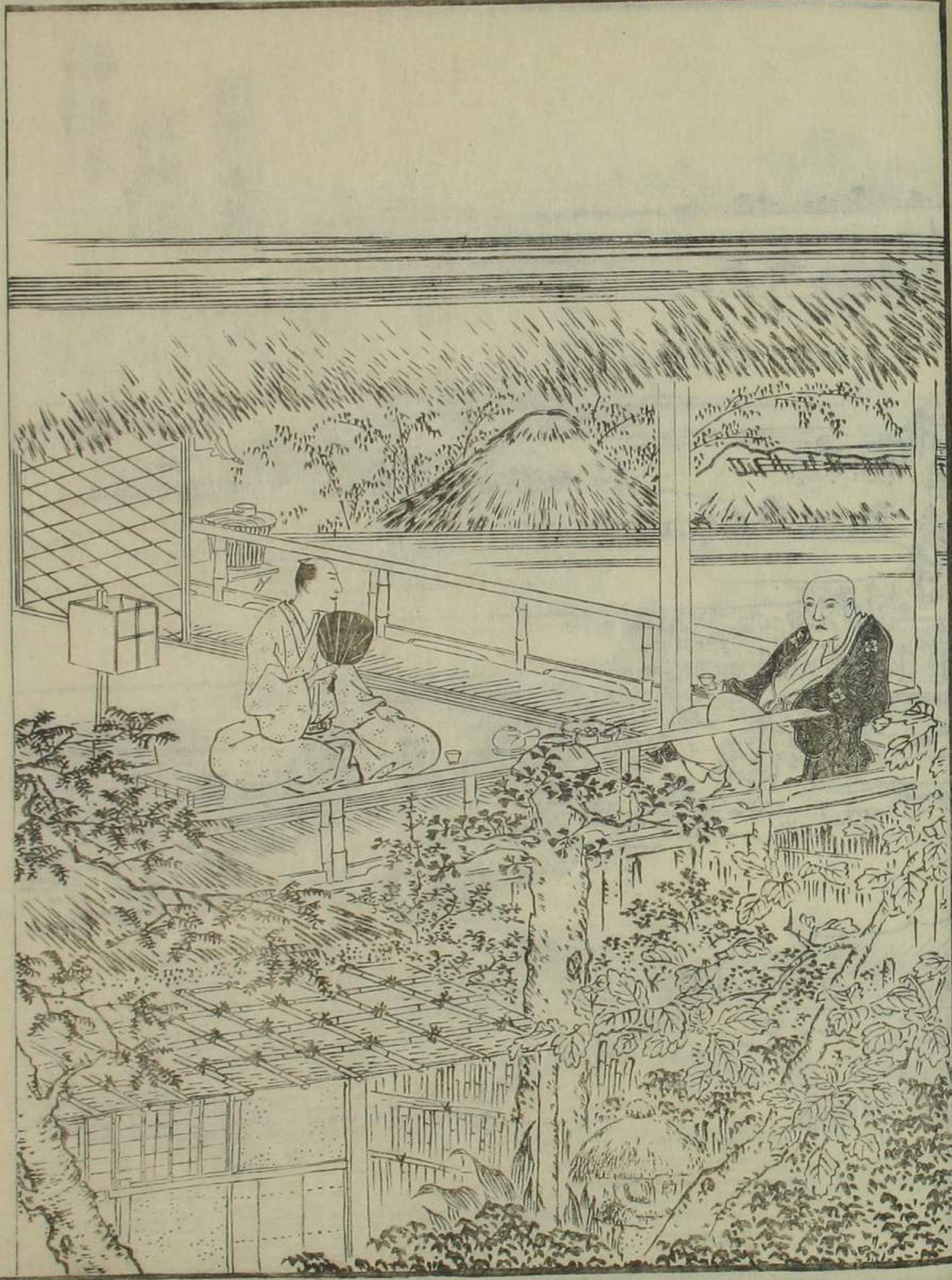
今戸八幡宮 今戸橋より一丁より北の方道よりをたわのり祭神山跡圃石清水

今戸八幡宮 今戸橋より一丁より北の方道よりをたわのり祭神山跡圃石清水

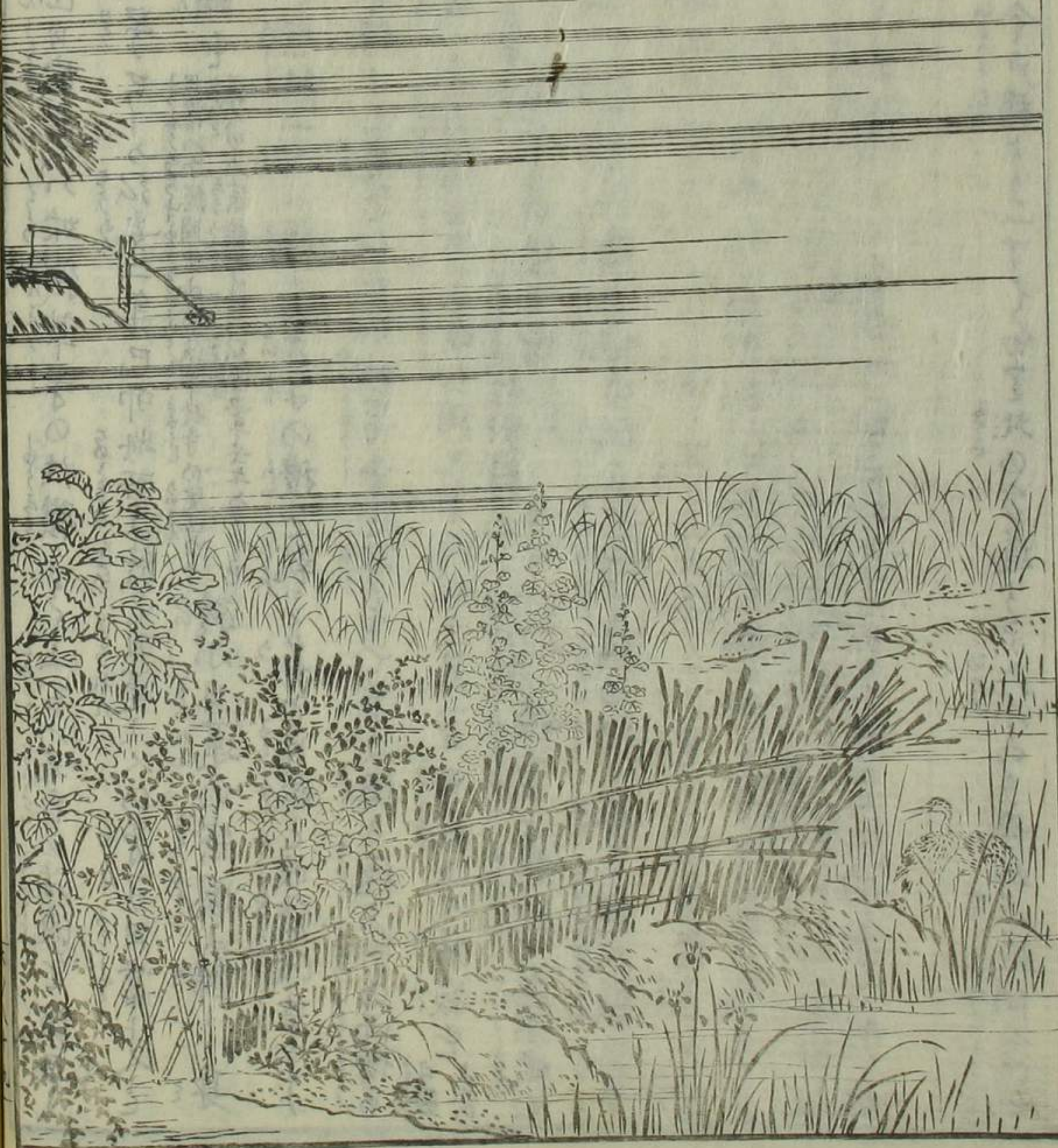
今戸八幡宮 今戸橋より一丁より北の方道よりをたわのり祭神山跡圃石清水

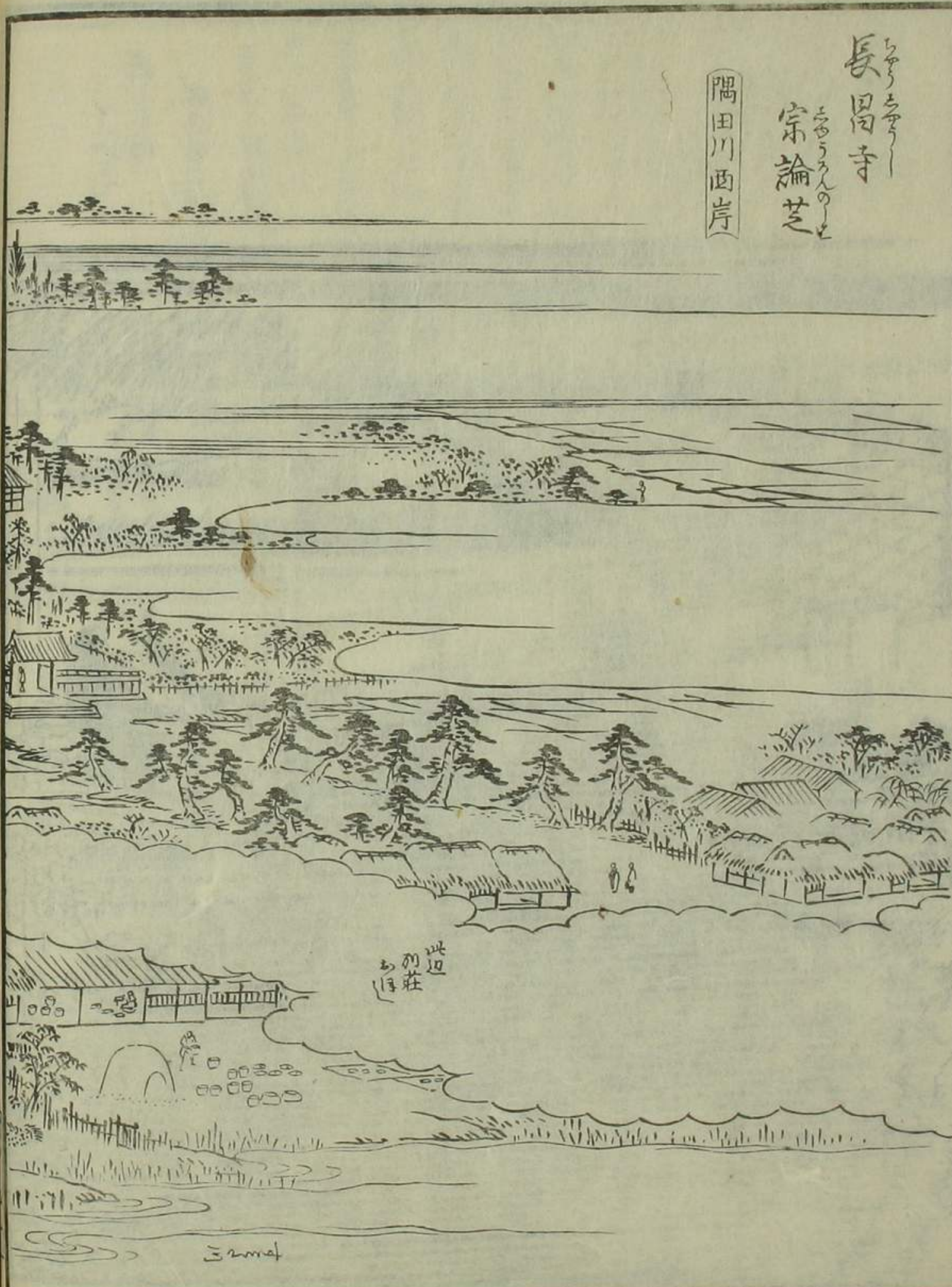
今戸八幡宮 今戸橋より一丁より北の方道よりをたわのり祭神山跡圃石清水

今戸八幡宮 今戸橋より一丁より北の方道よりをたわのり祭神山跡圃石清水



くひる 水鶏の橋場の
 ちよつたの ちよつたの
 を佳境とせり
 源氏物語にも
 あつた 源氏物語の
 花紅葉のさうり
 あるよりのた
 ちよつたのさうり
 あつたのさうり
 るまもあつたよ
 ちよつたのさうり
 ちよつたのさうり
 ちよつたのさうり
 ちよつたのさうり





長留寺
 宗論芝
 隅田川西岸

此辺
 河莊

三二四

小戸別當の天台宗より七松林院と号せ祭禮ハ毎年八月十五日より

放生會を後行せり

社記曰源頼義朝臣義家公と共勅を奉りて奥別安倍貞任宗任を誅戮

くゆの仍康平六年癸卯八月其祈願より鎌倉由比郷をよひ此今戸の

地に至り石清水八幡宮を勧請あり

按今戸の通音あり其後奥別武衛宗衡足牙叛逆の時も義家朝臣鎌倉鶴

岡をよひ當社八幡宮等より祈願ありて賊徒を亡し勝利あり故永保元年

辛酉両社の後造を加へられ行基彫造の弥陀を以ての本地佛より又同作の

茶師をよひ慈覺の作の観音等の像をも安置ありことあり其後文治五年

右大將頼朝公奥別の恭衛追討より進発の時も此御神より祈誓ありて勝利

を得あり建久元年庚戌下河辺庄同行子を奉行よりて宮社を重建あり然

小寛永十二年丙子

台命を奉り舟越伊豫守八木但馬守等是役司

に當社御再興ありより己降神光日小新の靈威月々盛なり

今戸

八幡宮

隅田川西岸



今戸焼
此邊麗者
陶器通ありて
是と産業
ととるを
世に今土焼
と稱と

元禄二年七月
旨隅田河
流り

今戸焼
のねま
露
つとむ
下尾
秋風



靈龜山慶養寺 同く南の方今戸橋の北の結あり曹洞派の禅刹あり

元山を明山良察和尚といふ 昔に鳥越西福寺の隣あり後本あり

の二字の願齋の筆れを辨財天社境内あり本その弘法大師唐より携来の

靈像ありて今戸橋の南の結ありまて待乳の作を或信土の作を万葉集亦打

真土山 今戸橋の南の結ありまて待乳の作を或信土の作を万葉集亦打

亦打山幕越行而廬前乃角太河原爾獨可毛將宿 弁基

今宵まて誰者ゆるん庵崎の隅田河系の秋の月ゆき 須徳院

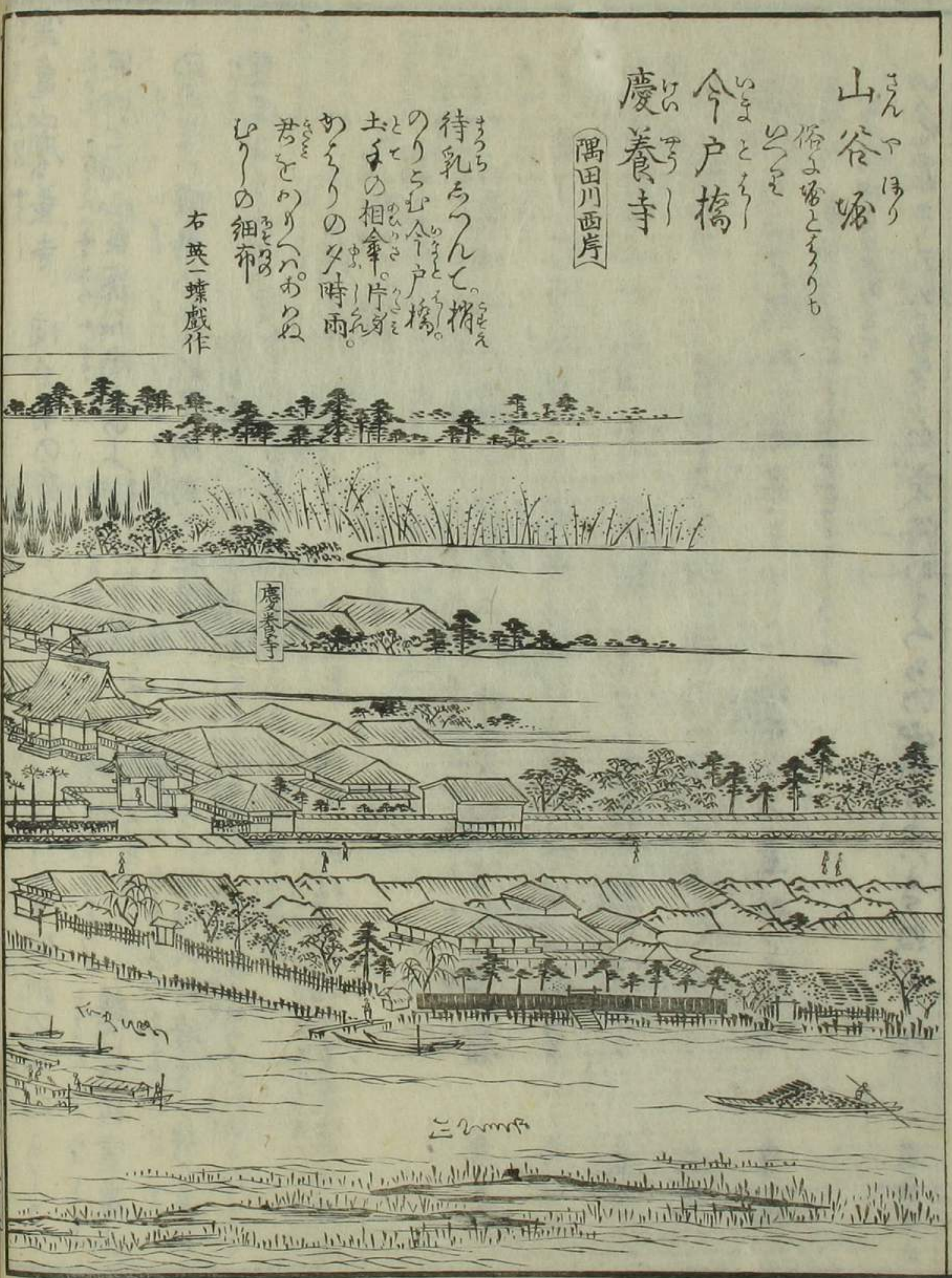
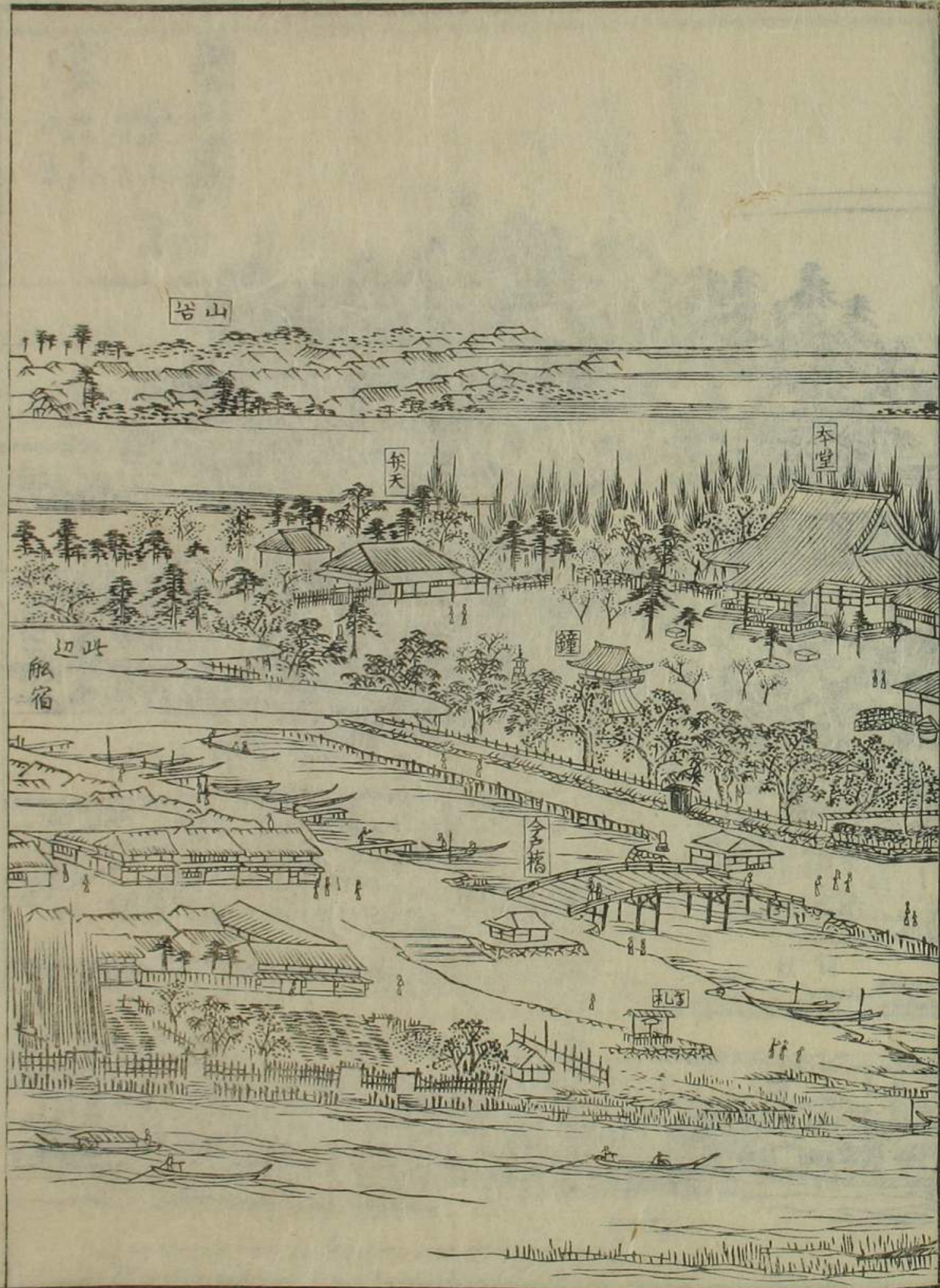
月影のささや菴崎すまて竹紙まらち山ゆきのゆき 家隆

誰のゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき 定實

ははら山夕越行の風寒をすまて河系ふき鳥れくるり 季廣

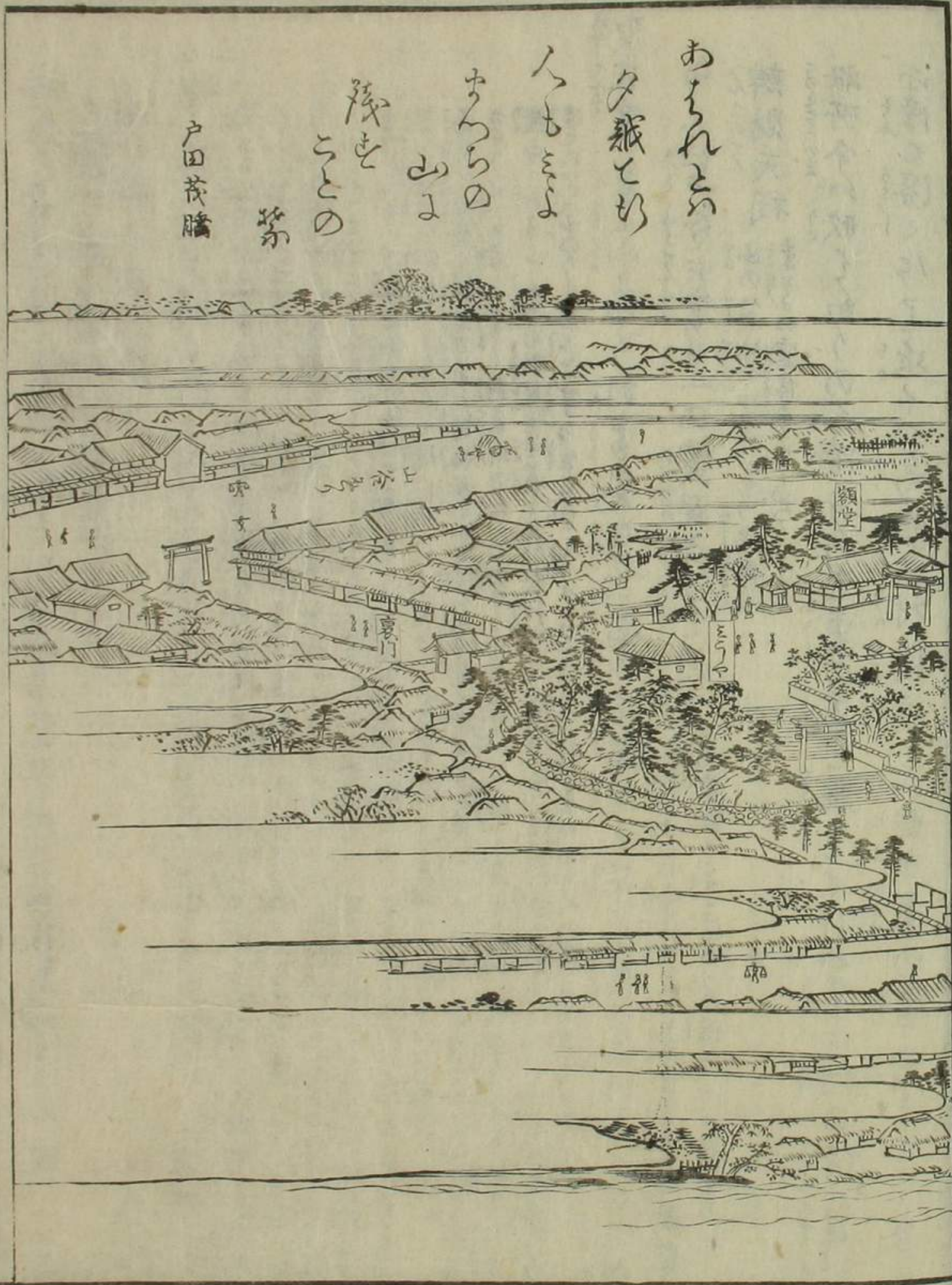
回國雜記 道きりる名不しゆきゆきゆきゆきゆきゆき 道安准后

まらち山ゆきのゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

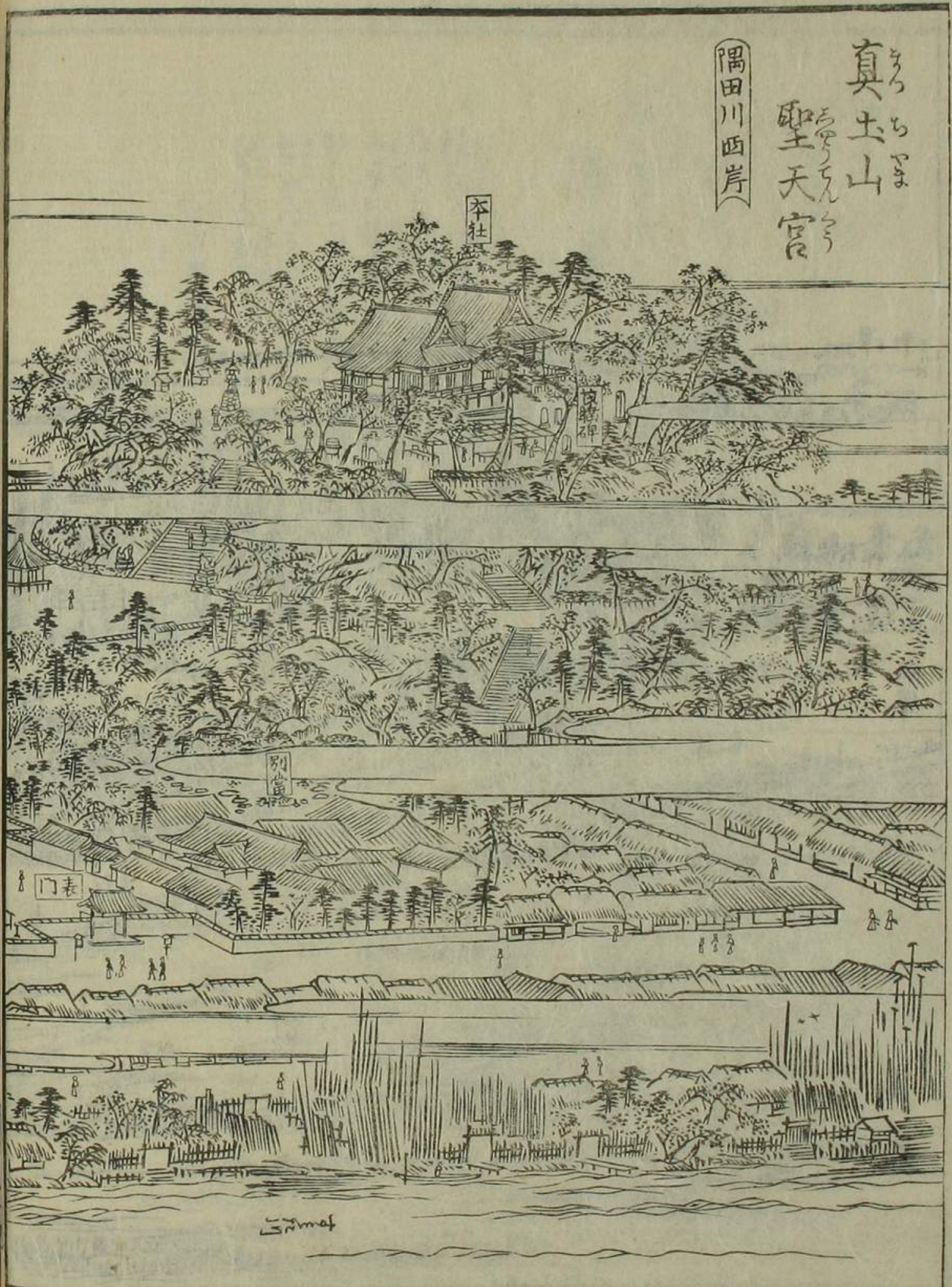


さんやほり
 山谷堀
 俗に堀と云りも
 いまと云り
 今戸橋
 慶養寺
 (隅田川西岸)

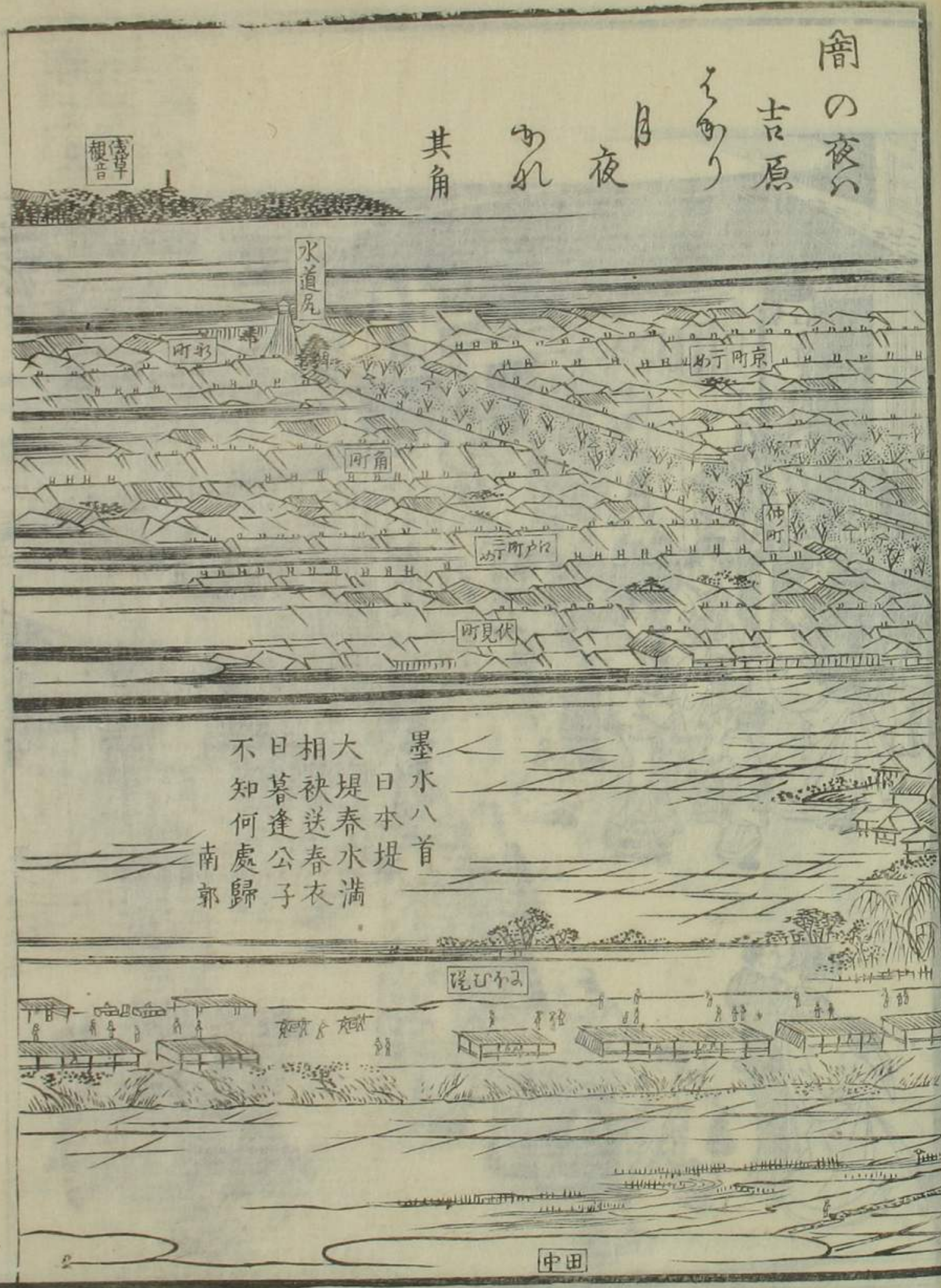
待乳あつんとて
 のりちむ今戸橋
 土手の相傘片
 あらりの夕時雨
 君をのりへありぬ
 じりの細布
 右英二蝶戲作



あられと
 夕飛と
 人もと
 ちんらの
 山よ
 後を
 ことの
 紫
 戸田茂膳



真土山
 聖天宮
 隅田川西岸
 本社



白原の夜

吉原

月夜

其角

其角

遠草

水道尾

町形

町形

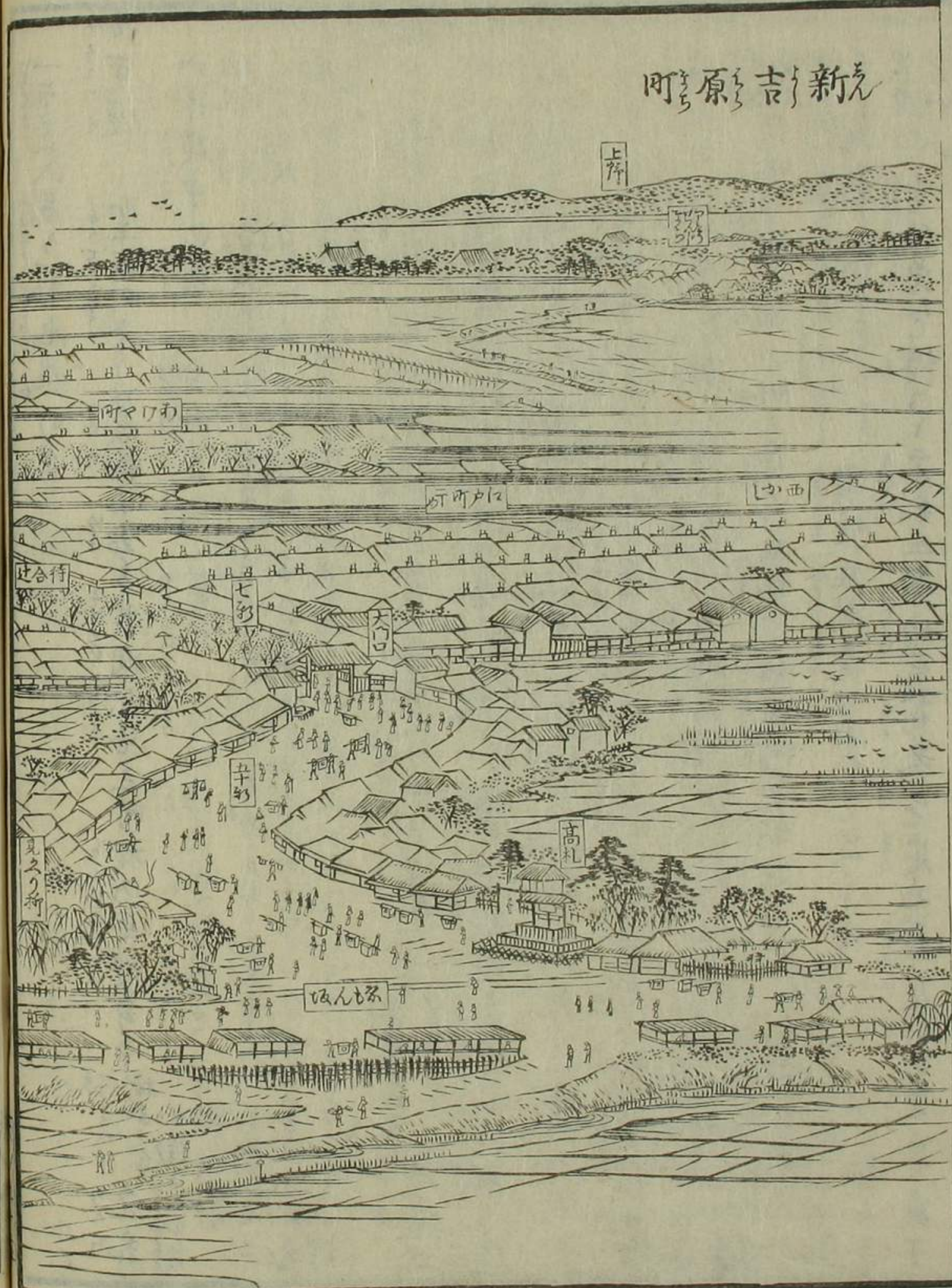
町形

町形

町形

墨水八首
 日本堤
 大堤春水満
 相袂送春衣
 日暮逢公子
 不知何處歸
 南郭

中田



新吉原

上

町形

町形

町形

町形

町形

町形

町形

町形

中田



四方の地を賜ひ是れ古吉原町と号す
今所謂高砂所住古所藤枝町等其地なり
あつちを嗣いで故に藤原ともいへりしを賈して古吉原と作らば或は事跡合考をいひあつちを吉原と
元禄元年の江戸産子等の書より其始發別え古吉原よりうんと故にこの号ありと云ふ
 翌年並吉原
 落成を告げ江戸益繁昌一人萩蔓を布れい明暦二年の冬竟々今今の
明暦三年丁酉
 所を替地を賜ふ
八月今の地より
 依て新吉原町と号すといへば花柳のまこと
もと
 此二都の魁たる其賑は特殊生の花の頃をりて勝たりとて春宵一刻の價
五まん
 千金を顧む初秋の燈籠の万字屋の玉菊の追福よりまを八朔の白重の
もつて
 巴屋の高橋よ起る今も粧目をりて更衣の節とを名を二度の月々の
見
 全盛のりよもさらざるを悉く其美を攀ふいとまありとをさらりて此処より
是れ
 是を界と

江戸名所圖會開陽之卷終

